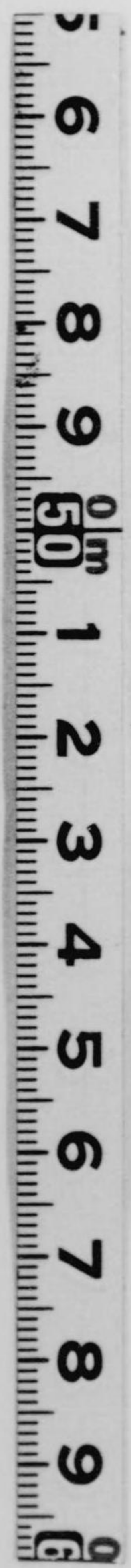
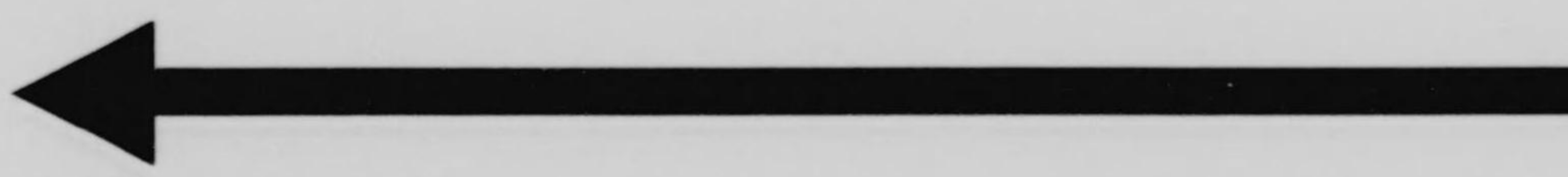


350

384



始



エ8R-96

350-384



オイケシ
ミ
ベルグソンの
哲學



“ I have just finished the perusal of your book, and anxious to tell you what great pleasure I have derived from it. It would be impossible to approach the study of my works with a more kindly sympathy, or to disengage their essential tendencies with a surer penetration. While many critics have sought to pick a quarrel with me on this or that single point, stopping short at the letter, you have gone straight to the spirit. I readily accept, as a whole, what you say about the relation between the spiritualism of my doctrine and religion.”

ベルグソンの書簡

余は貴下の著書を熟讀し、而して貴著よりして得たる大なる觀喜を如何にして申上ぐ可きかに苦心致し候ものに之あり候、貴著が之れ以上更に熱き同情を以て余が著作の研究に接近する事は不可能事なる可く、又之れ以上更に確かに徹底したる説明を以て余が研究の本質的傾向に分離することもまた不可能事ならんと存じ候。而かも幾多の評論の内には余と論争せんとて彼是と唯だ字義に止まりし微細なる點を探し求むる者多き中にて貴下は直ちに精神を捕捉せられ候。全体に於て余は貴下が吾が唯神論の教理と宗教との間に介在する關係に就て言はるゝ處を承認するものに御座候

"I feel impelled to express to you my most hearty thanks. You have expounded my views in a way which is altogether excellent. That you have done so in accordance with your independent conviction, and have therefore also given expression to your dissent from my dogmatic position, makes the book specially valuable to me, and will also enhance its value for your readers. You have done your work with as high a degree of objectivity and thoroughness as a genuine German scholar (Gelehrter) could possibly desire."

オイケンの書簡

余は貴下に對して誠心の感謝を表さざるを得ない。貴下は優越なる方法を以て余が觀察を解釋せられてをる。そは貴下が貴下の獨立的確信に依て成された事である。従てまた貴下は余が獨斷的立場を離れて貴下の意見を示されてをる。夫れは亦此書が余に取つて特に價值ある所以である。而して其價值は貴下の讀者に對しても亦廣めらるゝ所のものであらう。貴下は獨乙の眞の學者が渴望するが如くに客觀的全體的の一程度に高めて貴下の著書を完成せられたものである。

はしがき

十九世紀の後半期に襲ひし自然主義科學萬能主義の潮流は涸れて生命一切を擧げてその本來の姿、哲學的精神に解決を求めんとする絶えざる泉は獨乙に於てはオイケンに依てカント以來再び精神的轉向はなされ、その泉は生命の中心となり思想界の中心流を形成するに至れり、然るに歐洲に於ける精神的文明、精神哲學の復活は我が日本に於ても同じく思想界の革命を起し精神的轉向をなさしめぬ。彼の哲學はカント以後獨乙に於ける唯心論の系統を承けたるものにして彼のカントに於けるが如く批判的哲學者にあらず最も親みしヘゲールの系統を承繼せる主觀論者にしてまた彼のベルグソンに於

けるが如く積極的哲學者にはあらず、よく時代の趨勢をば観察し古き思想の流れをば吾人の前に現はし之を高き狙と定め而して他の缺陷をば指して墨守せず之を大なる思想に吸収し又新らしき流れをば努力と成功とを以て表はしたるが如く實に回顧的歴史的哲學者なり而して彼が思潮を観る觀察眼はよく人生必然の要求を察し新理想主義の爲めに自身をして精神的戦の光景に投じ吾人の新らしき理想は此の戦の境を超越するに依て得らるゝものとなし吾等が内的生活理想生活の可能なるに到達し得べき徹底し得べきことを示したるものなり。

翻つて佛國の哲學史を通觀するに歐州大陸の哲學史に重大なる意義を與へしデカルト出で、より茲に三百有餘年の間ニムトの積極主

義を稱えてより哲學史に直接意義を與へたる者は少く實に大樹の蔭に湧き出する細やかなる泉の感なきにあらざりしがベルグソンを出すに至り再び佛國哲學史の光輝は放たれぬ、而して此國に於ける思想は環流する潮流の如くにはあらず細やかなりと雖も泉の如くデカルトに於ては近世哲學の始祖とも稱せられ因襲的神學的なる煩鎖的哲學の學風をば切り放ちて個人的純理的主觀的はた絶對的哲學の出發點をば形成し過去と近世とに大なる區劃をなさしめたるが如く實に開拓的積極的なり而して彼のベルグソンに於ても此の如くにして彼のオイケンに於けるが如く主觀的に反して直覺主意説を建てんとするものにして此點に於てはシヨペンハウエルと類似せるを認むることを得、さればベルグソンの出發點とする所も直覺的方法に依り

て最も本質的純理なる事實に接し直接經驗の境に全自我を没す事に依て實在の眞意義を得んとするものなり。

* * * * *
本書は基督教徒の立場より兩者の哲學の傾向と價值とを平明に叙述評論しやうとしたのであつて基督教的氣分の含まれたことは免れないが、然し全體に於ては基督教の氣分をなくして觀察すること出来やう、で基督教との關係を引離して考ふれば本書の如きは兩者の哲學をば研究せんとする人々に對して其渴望の一端を充たさんとするものであつて一面に於ては兩者の哲學に對する興味を得られ又一面に於ては兩者研究の準備となり而して兩者の一長一短をば窺ふことが出来る、故に言を更へて言へば本書は兩者の哲學を深く究

めんとするより寧ろ廣く行互らんとするのである。

大正參年六月七日

鎌倉にて 譯者 謙

凡例

一、この譯は Hermann の Eucken and Bergson their significance for christian thought に依つたもので、後編の「基督教神學と近代哲學的思想」は少しく基督教の氣分が含まれて居るので省くこととした、而して譯は主として譯文の調色が犠牲になつたかも知れぬが原文の意味を紹介しやうとしたので或は讀みにくひ所が有るたらうが版を重ねることを得るならば全部訂正することとする。

二、併して本書稿正中不幸にして前半は自身稿正をすることを得なかつたので意外の誤謬があると思はれるが何卒自分の意を了として貰ひたい。

三、山崎先生が熱き同情を以てせられたのは茲に衷心から感謝の意を表するのである。

四、繁忙中に稿正の勞をさられた小澤忠君に對しては誠心より感謝するのである。

五、終りに臨んで原著書の意味を充分に表はすことの出来なかつたことを讀者に許へてをく。

譯者

オイケンとベルグソンの哲學

目次

第一章 近代思潮の診断

- 二十世紀の趨勢.....一
- 樂觀主義者、悲觀主義者と傍觀者.....二
- 十九世紀 中期との對照.....三
- 犧牲的懷疑者の典型たる—ロバードエルス、マイヤとエツチ、クルウフ—.....四
- 現代の宗教的印象學派と折衷學派.....五
- 「國の光」—自然主義と主知主義の破産.....六
- 自然科學對自然主義.....八
- 主知主義の皮相的非難.....二二
- 未來の哲學.....三三

實際主義者—有意主義者其他如何……………	二六
近代思潮の三大要素……………	三二
文明と修養に對する一般の不平……………	三五
宗教的經驗に因る眞理の確認……………	四〇
道德至上主義の確認……………	四五
○ 第二章 ルドルフ、オイケンと精神生活の哲學……………	四七
オイケンの經歷と著作—特性的大著述—哲學的來歴……………	五〇
新理想主義の首唱者……………	五七
オイケン自然主義と主知主義の評論—自由人格の辨護……………	六一
○ 第三章 個人主義より人格への否定運動……………	七一
世界的自己と宗教的理想主義……………	七七
○ 第四章 宇宙的人格と宗教的理想主義としてのオイケンの哲學……………	七九

第五章 活力主義としてのオイケンの哲學……………	八八
第六章 オイケンの歴史哲學と過去の生活……………	九八
第七章 社會化せる人格と超人の崇拜……………	一一三
觀樂的精神の基督教……………	一一六
オイケンの背理主義と心理學の輕視……………	一二九
彼が英國思想界の近代思潮に對する意義……………	一三三
○ 第八章 ルドルフ、オイケンと歴史的基督教……………	一二七
基督教徒の思想に對するオイケンの地位……………	一三六
「宗教の眞理」、之が「神來的性質」……………	一三九
オイケンが啓示よりも直覺に重きを置きしこと……………	一四二
「吾人は尙基督教徒たり得るか」……………	一四四
非獨斷的基督教に對する辨護……………	一五五

彼が近代思想の徹底的評論……………一七〇

教會獨斷の評論と排斥……………一七六

獨斷背後の使徒が傳説したる經驗……………一七六

人間としての基督は其重きに耐へ得るか……………一七九

人生の小宇宙は感化の大宇宙に依て解釋せらる……………一八二

奇蹟に對するオイケンの態度……………一九三

アフリ、ベルグソンと創造的進化の哲學……………一九六

ベルグソンの經歷と著作……………一九八

ベルグソン主義分派のフランスに於けるプロチンの如き態形……………二〇〇

ベルグソン學派の新ローマ教と共産革命主義……………二〇六

ベルグソンの雙びなき典型―彼が三大著述……………二一四

ベルグソンの主知主義に對する十字軍……………二二二

第九章

具體的連續としての彼が時間概念……………二二六

ベルグソン學派と理知主義との問答……………二三三

實在の要素を握る能はざる観智的概念の活動寫眞……………二三三

交感的直観は眞生活内に歩を進む、是生命なり……………二三六

理知の官能は制限され且つ應用的なり……………二三六

然れども「有限は之に超越するが如く見ゆ」……………二三八

論理的革命……………二四四

個的進化より創造的進化へ……………二四五

新世論對進化―即ち機械的と目的觀の評論……………二五二

生活衝動、根本的と無數の創造物……………二五九

本能加ふるの観智……………二六三

生活衝動は目的であるか―パルフィアの評論……………二六八

自由との結合體であるか……………二七〇

オイケンとベルグソンの哲學

第一章 近代思潮の診断

各時代の墮ち易い趨勢が前時代の革命的力並に壊亂的力によつて暴風雨に荒された如くに破壊されたのを観る間は、魅せられたように遠い幻鏡に雲りなく静まつた、この若々しい二十世紀は自下の念で甚く刺戟された厭世主義で壓せらるゝことはない。而して、あらゆる方面の享樂的樂觀主義は、その來らむことを期待して居た、善

山崎 壽春 共譯
下野 哲四郎

目次終

福音としてのヘルグソン哲學に關するウィリアム・セームス……………二六六

神に對する評論は人類の歴史を有するか……………二六八

宇宙と神との關係……………二七〇

結果の國に關するセームス、リード教授……………二七四

「神人同形同性論的」神……………二八〇

化身—自然の神に對する「祈禱者」と基督に於ける神の答……………二八二

創造的進化と基督教……………二八七

時を説明して居る。頽廢した唯物論とか無味乾燥な主知説は生活の新らしい觀察、即ち精神生活の哲學に依て覆やされ且超越せられた如く一般の人々は遂に再生といふ信仰が哲學的考究の秘密的廟に於ける一點と一致したと聞く勇氣を起す、また、科學は遂に宗教の新入者の如く思想の起端を求めて居ることを語つて悦ぶのである。而して、一般の疑問はオリバー、ロツヂガ精神を以て充分解釋せらるると言つた。で赫々と光り輝て居るオイケンに心を注ぎ且つ唯物論的文學の前で更に羞かしからぬベルグソンを研究するやうになつて來た。この悦ぶべき望みある精神は弱々しい抵抗力の無い精神を含んで居るのではない。かくて人間の重味とか落着いた先解性が豁谷を深し騒々しい暗黒な中を迷ふて居る間に、時代の精神的發出に對

する千里眼は遙か彼方の岡の上に淡く輝く光を認めるのである。之に反して、厭世主義は十九世紀の英雄的奮闘性と吾が二十世紀の瑣々たる揮發性の時宜的性質と對照した心盲的尊奉主義から吾人を救つて居る。この偉大な觀念に對するその不快な歸依と、その感情的人道主義と、その思想の擴漠な原野に流るゝチタンの銀河に反して觀察すると吾が時代は平凡とか俗とか無用とかの中に現はれるのである。で、眞に岡の上に光があるならば心盲に對する光の効用は何であるか。また、眞に來るべきその偉大な事物に對して吾人の調和性があるならば效用を顯はす最高な力に汚點が有るか。吾人は潔白と早塾と混合した不備とか矛盾とか困難とかいふ生命の市場に居る意地の悪い小供等より更に悪くはなからうか。然し厭世主義は

各時代に壓倒される熱の冷めた傍觀者と比較して見ると少々な民である。織物は個々の叫びとか智量の花糸で欺く様に織つてあつて、模様は亦狂氣といふ模様で、梭は亦た目を暗ますやうに早い、されば理性のものは唯だ待つといふことばかりである、この態度は種々のものに必要であることは言ふまでもない、されば是は精神の絶望的性質であつて、かゝる期待に向つて虚が嘗つて來たと云ふことを含でゐる世界が茲にあることを忘れて居た。

吾人は厭世主義が十九世紀を臂越しに顧り見るより悪いことをする、故に吾人が必從的自己評論は唯だ魅せられた如に遠い所の幼影であるといふやうに恐るゝだらう。若し吾人が實際英雄の氣質の様に立派な品性を持つて存在して居るならば此上更に光輝するものと

なり、心地の善い聲で自負するであらう、隨て遠い反響もあるであらう。是は彼その時代に於て彼等自づから吾人に今だに要求して居ることである。若し誰か此性の便宜的、通俗的説明を求めんとするものがあるならば、之を「ロバート、エルスマイヤ」の中に認むることが出來よう。かくて、一見したところでは虚偽的性質で、殊に例として撰ぶに當つても不幸な例なることを免かれぬロバート、エルスマイヤの如きは是を心理的にひき出すに當つても亦た貧血的である。故に、全く虚偽的性質としての、かゝる無効の地位からひき離すと彼が説くところの神學的、宗教的立場は殆ど不可能といふ程また驚く程今日も存在して居る吾人が心を刺戟する。然し彼が神經的な話と悲惨な闘は古い世界の聖徒の物語として低地とか山村僻地に響く

ばかりで、かゝる古傳は聞いたところで何等の畏れをも抱きはしない。されば恐るゝものは佛蘭西とか獨乙の新らしい空気を吸つた學理より他にはない、而して、是が言葉は言ひ盡されぬ様な苦しみの中に介在して居る此正教の真理または精神の方に纏つはつて居る。然し、彼は十九世紀の勇剛としては神經質で弱々しかつた、だがこの時代では雙びなき程特質を現はして居た、さればかゝる貧血的なものを現代の臆面もない困窮はこの勇剛の如くに、金の様な光を非難するのである。またロバート、エルスマイヤを讀むと一目瞭然として彼が時代の苦しい心を知ることが出来る。で、此時代の實現せんとする恐ろしい力、悲痛な力、殆ど亂心したかの如き感情は共に、明かに敵意ある思潮の勢力に對して精神の衛城で防禦し、また、最

早搖げ落ちんとする壁に防材を用ひて死守した、が終に打破られて今では唯だ割目の中を匍匐する如な抵抗力のないものとなつて仕舞つた。

虚構から生命に反つた、吾人は唯だ稀に精神且遙かに強い「アツサ」、エツチクルウの如く、また英雄の如く、疑惑とは一刻の猶餘もなく戦はねばならぬ、彼が一生の歴史を讀むと十九世紀の辭を操返して貰ふようだ、そうして此歴史の光ともいふ彼の詩は現代の弱々しい精神には立派な收斂性を帯びた旋律である。又彼が小年時代を見ると誰でも過度に刺戟された道德的意識と早熟な道德的發達の犠牲であつたことを明かに推することが出来る。隨てその實在は別問題として誰でも心打解けて語り、または此詩を讀まむ者はあるまい。

而して大きな救の無い精神の戦は暴悪な自然の病的贅肉とはならなかつた爲めにネシらのシャツを衣て居る如に疑を纏つた、疑惑といふ兀應鷹の餌食になる各神経は皆纖維が生々しく裸かになるまで捨て、あつた、而して人々は和解てふ餌を食ふのを非常に賤み、此時代の人々は崇高な尊敬の價值ある夢の如く、或は、悦ばしい藥用の虚偽の如く彼等を支へた、一事實としての神を否定し不滅を否定したのに因る特殊な心的欺偽といふ時代の——理知的麻醉劑を受け、るのを更に賤んだ。而して、彼の残忍なる正直は人間の心の中のへロツドの如なもので幾萬といふ希望とか感情とかいふ嬰兒を殺した、それが爲め、不正直は疑惑と妥協するのみならず、更に不正直は此確信から手を引いて仕舞ふのである。かくて總て彼の本心は彼に残

つた少しの金をも、金箱をも出せと迫つた。そうして終に茨の中を裸で歩けと言つて信仰の家から押出して仕舞つた後ち、彼は悉く取環いたものを、偉大に且根深く幾何なることが起らうとも避易しない正義の中に救ふものである。吾人はロバート、エルスマイヤの神經を失つた如に失望し意氣消衰の中を徘徊ひ居るのを見るが、蓋し剛勇な氣質は吾々時代とは常低相手にならぬ如に對抗するかである。「かゝることは望まほしきことだらうか」と言ふことは宗教的恐慌の例でなからうか。隨て宗教は貧窮に際して命に關る程の心の病に罹て居るのである。此恐怖に打たれた精神の神経病はこの人の赤く熱して霧の如く朦朧とした仲間の中に敵の如く、または打撃が一撃を加へんとするに先立つて、敗北は恐怖に戦ひた如くに現はれるだらう

bad translation!

か。若し吾人がこの敗北といふことを持つて居るならば、吾人が心は擴く且達者なものではないだらうか。真理は最も粗末な處置を生殘らせることを實現させるからで、信仰は科學者とか評論家のなすが儘になりはしないだらうか。

此真理は廣い範圍に對して、亦たこの真理は自覺とか病的内省とかと結んだ過去の英雄的性質に對してもまた同一である。然し吾人はこの真理を失はなかつたであらうか、何となれば目的究意的論旨の嚴密な意識と緊急な意識に缺けて居るからである。また、この究意的論旨を着眼した人々は彼等の狹義的概念を不用にした代りとして吾人に迫つて来る。

さて吾人は直ちには吾人が甘き國、光の國の聲を信するに當つて過

去てふ、鏡の中を長く且深く覗かなければならぬ。幾多の實在は様々な平和が吾々の中に介在する精神的要求の復作を信じないといつて居る。又、茲に人格が精神的で追求されて居る間は決して時間はな

いと言つて居る。が是は或意味に於ては疑がはしい様ではあるがまた真理である。されば、偽神祕的崇拜は此事實の多い形跡の中の一つである。然し精神的復作は今のところでは探求よりも亦た少ちさなもので恐ろしい夢の様な朦朧とした遁げやすいものである。されば宗教の最ち儒正とか、或は精神的生活の他の救ひ主は此朦朧とし浮浪する難義や、精神の觸感し得られぬ様な當惑とか絶へづ移變する痛とか面倒な指示とかいふ様な過ち羊は精神的事件を總稱して一般に運んでくる。昔の聲で「救ふには何處しなければならぬだらうか」とは今迄、吾々時

代の中に大きな叫びとなつて残つて居る。また假令時代の中心が幾多の精神といふ微かになつた叫びを持て居ても壓迫の下になかつたならば刹那は罪惡とか煩悶の中の深い淵に落入つて仕舞つて疑問、希望、推測、願、目的、嘆息、悲衰といふ聲を稀に深い淵から擧げればかりである。而して何を信じてよいのか分らないとは精神の亂れたときの紋切形の語である。然りといへど多くは熱中のよりも不満足の意に用ひられる、かゝる感情は悲壯な最も強い交感性に落入ることが多い。又精神はかくの如き無益な羽根で翼を鼓いて飛ぶ鳥と語らひかくて不思議な合體を求め、稀代な巢を構へんとして深く舞ふ。また時として論旨は迷ひの言葉に盲目の如く譲り、また時としては鐵面皮な放棄に譲り、さては齒をむいた大儒主義に譲るので

ある。いかに稀な狂亂であるか、失望であるか、將た信仰であるか、品性であるか。稀にも疑に満たされた如く、是が精神の眞の情緒の中に根をつけたであらうか。更に宗教的執心に満ちた如く、彼等は美的意識よりも寧ろ良心より湧き出でたのではなからうか、さて精神的な恍惚状態は意識の上に基礎を定め、斯くて不定の折衷學派は此主義を咎めたて又は脅かすのであつた、而して不行跡な習慣は不可能と云ふ眞理な注意をつくり吾人が近代宗教に普通の印象主義者の品性を與へんと團結を以て襲はんとするものである。吾人は最も頹廢し且粗製の引粉の如な唯だ理論とのみ相并で現存する宗教的好事の水腫の様な情緒を持て居る、かくて神學に反對した烈しい反動は媒介者の顔に泥を塗るような迷信的尊敬と關聯した精神の切なる

望も解釋する「外形的」または皮相的に存在する。外面的中心問題に對する非尊奉的な嫌厭の感は多くの求心派の人々の中に示され且宜教師と文士との相對物を持つた此人はこの困難な趨勢に對するよりも精神の氣分を支配しまた精神の緊張性を支配するのである、勿論羊修養の人物が激増して來る之の數は物質の狀況に對してまた多大の責任が有ること、思はれる、かくて文人の宗教と云ふのは幸福子とでも云ふばかりで大學の巡回講演をやつた後は豚殺の政宗でもした者の様である。隨て哲學とか神學の野では此斷音的印象主義者の性質が甚く示されて居る、一般の空氣は光輝ある光の如であるが、また不定な知得、放浪の見識、斷讀的、暗示的で系統的働は憐れにも僅かな物象を保つた。而して哲學に於ての野の暗黒なまた朦朧とし

た一角には件々講明とか技業問題の解説とか、また之が解釋法に對しては時間と思想に依らんとする傾響がある。而して神學の系統的な動きに於ては批評に對しては殆ど獨占的な範圍を持つて居る。だから畢竟吾人は靜止に對する僅かな主觀に關しての確信を有するのである。されば新鑑裁法は一種の小さな趨勢に對して不定に意義を定めた福音の評價を以て巧みに且愉快に處置するに進歩して居る。一般的な道徳の中には唯だ種々の思潮が流れて居るばかりで、この全體的反對、任意的道徳に對する部分な反對と云ふ全體的反對は思潮に對して彩色を加へ且熱誠なる執心を導く、されば遂にニイチエは英國の界想界に重せらるゝことゝなつた、多少エツチ、ジー、ウエルスの如く、斯の如き彼が判然としない屈折光線に於てのニイチ

エの義理は——非常に物事に熱心なる故を以て尊敬された文士——吾々と同化した。判然とした論旨は受動的と消極的な完成な範圍から人格的精力と化し、會合的慣習から神聖な精緒と化し、制慾主義から生命の自己確説と化して自づからの道徳的の變化に因つて歸する所は基督教の思想である。

吾人は遙か彼所の悲觀主義者を預言者と假定して觀るとこの預言者は岡の上の光を見出すであらう。かくて吾が時代の性質の中に存在することの光を間瞻たる中に轉じてみると眞理は悲觀主義者のみならず預言者と共に存在するだらう。されば吾々は曉の光を見なければ闇膽として一步を分らぬ谷間から岡を仰ぎ視ることはできない、また街上で人から人を見渡す場合にも吾人が上には新らしき世界が

降て居るといふ觀念がなくては見渡すことはできない。街上の人に就て言ふと盲目を救ふ道は先に立つて導いてやるより他に善い方法はない、されば街上の人は最も敬すべき此注意に對して順に従はなければならぬ。なせかと言へば、盲目を冷笑し嘲笑するのは自づからの考への淺い偏狹的なものといふことを證明するのである。然しかくの如きは明白な事實で若し吾々が總ゆる物の標準とか限度とかを造らなかつたならば、吾人は遙かに城の仲間として盲目を助け、盲目の心に潜む恐怖を潔き心に救ひ、誠心の念まれた清き心に變じ、また彼が苦しむ過羊に先立たねばならぬ。かくて教へ導く者は遙か彼所の水平線に救はれた雲を認めるのである、さすれば、預言者は何と言ふだらうか。

斯なことは最も日常の話題となつて來た。最も近代思潮の望ある特色は新しい作力的哲學に依て打破せられた自然主義並に主知主義の對抗的系統の一般的破産の中に發見される。例へば吾人は精神の物象に向つての一般科學者の態度或はかゝる物象に對する自然科學の結果の態度を以て特性的な十九世紀の自然主義鑑定の中に滑り反へらんとする傾向がある。吾人は今日この自然科學が智識に對する全運動の最も慎重なものだといふことを忘れて居る。だからラジウムの發見の如きは科學上の過信に對して嚴なる警告を與へて居るのである。斯な事が偶々あるのは刺戟する爲めに最も必要とするところである。

或は亦た吾人が無意識に織る氣體エーテルを呼び、而してヘツケ

ルは、自然の問題、力、重力、エーテル、視器、分子説、化學に就いて明確な科學を知つて居るか」と獨斷の首魁に問ふた。かくて一般に科學の或派の確説は全然打破られて仕舞つた。然し他派の慎重な不可思議論は「未知」の上に存する尊敬的な冒險に因て復置されるやうに段々と傾て居る。また他面では、自然主義は哲學の家僕で、此家僕は科學の方法とか原理に對する實在の全組織、主觀の獨斷に向つて同意した、故に語をかへて言ふと、此人はこの自然科學は眞理とか或は可能性とか云ふ全組織の獨占的な手段で有ることを信する人である。此論旨、科學は絶對である如に假定された、即ち其物本來は多少固定的完全なるもので是が心は言はゞ外面から觀察し得る性を持つて、後は殆ど記述的作用の習練をなすばかりである。勿論、吾

々は假に眞理の終局表示としての科學の假定を受けなければならぬ、また趣味な機械的決定論に譲らなければならぬ。然し是は中古のヌカラ哲學に再び墮るのと全然同一で——即ち生た語が死の系統に落ちた化石の如く、近代思想はかゝる自然的「外面」観察を拒絶するのである。吾人は最早人間の心の「外面」としての科學は注意しない。是は最も終局の原理である、然し吾人は是を創造し且支配する思想に就て唯だ悟り得るばかりの心の活力として是を考へなければならぬ。して科學を機械觀の幽靈の國から救ひかくて眞の活力的哲學の中心で有る。本源で有る、精神生活の範圍内なる自己の場所に元の通り還してやる。而して自然主義は活力的精心を打破らんとするばかりでなく却て斷へず激増的語勢を與へ且是が報償につとむるのである。

是は生今論點とか、實在疑問を實際に論じたのではない、だから「精心」で有るか或は「靈魂」であるで、是は働の能力あるもので有るばかりでなく其物本來の動作であり、また生活で有る、而して創造作用であり、自己創造的である。自然主義は、この心的作動を眞と認て居る間に其派生物は即ち自然過程眞の連続であると明言する——かくて自然過程法、眞の副生物、無效の附隨物に従ふのではない。

然し亦た是は主知主義に羊蔑視的な非難を注ぐに容易な風潮である。依て此事實は主知主義を忘るゝ部分的義務で、第一に自然的形而上學の唯物論を根底より砂壊し、不評に落入る生命の機械説を大きくした。幾分か事情に依て異つた自然的哲學、又は主知主義は英國人の哲理的な精心の表面を破ることは少ない。主知主義の一般に

受けた觀察は哲學者の自己想出を除いて萬物を實在に類別する冷憐な非人格的哲學に對して、殘酷な相合的哲學を代表して居る。ヘゲールは英國のヘゲール學派の如く便宜上共に等分した擴い不同一的、間生的發達に對して責任を負ふて居る、又ヘゲールは多く反復を経ても信服力を贏ち得ない一般的鑑定し復合的に拒絶した其の意去、とか清緒から思想の概念を取る爲めに思想的化身の如くに、また觀念は肉を造つた如くに尊敬されて居る。隨て主知主義の片目的觀察は非とせられて居る、なせかと云ふと是は其自然の對當虚偽に落入るからで、單獨實在に在する心を高め、錯覺に對する感覺を下した。かくて是が善く釋義された意識に對して道理で有る間に其は重要な論旨を隠滅せしむるのであつて、最も困難な事實は自然主義とか主

知主義とかの二つは精神の創造的活力、或は自由の中に等分し、或る場合には意識世界を支配する定律を受け、其他では思想律を受くるのであつて、而かも或る場合に際して吾人は機械的決定論を有するならば、他面にては論理的主知主義は論理的必然の認識に對する自由を感せしめた。自然主義は科學を恰も絶對の如に觀察し、主知主義は哲學を自我とか自身の不滅的辨證法を経て進歩した現存である如くに觀察した。そうして主知主義は直接與科の虚待から又は自然主義としての意識の束縛から吾々を自由にする。若し是が明瞭に且つ明白で無かつたらば此束縛された意識は實際に讓歩した人格とか自由に依てこの與科や意識の勝利の眞の立脚地で自殺を計るのである。茲にヘクタマクヘルソンが與へた此場合に際しての簡明な示

したことを引證すると彼が著書スペンサーの中に「あらゆる應用的目的は精神的原理の一時的合體の小さな心であるか、物質の特別的組織であるか。亦た或る場合には人は時間の大きな流の水の泡で有るかも知れぬ。吾人はヘゲル學派或は唯物論語の泡を論ずるかも知れぬ。だが結果は同一である——即ち全稱命題の専心であるからである、此二つの體系は必然の手の中に捕虜、即ち人間を遺す。單なる差異は唯だ差その唯物論が捕虜の頸の周りに戰場を置く間にヘゲル學派は見すばらしい輪索に邊を付けそうして飾りたてる。外のが詩的な葬式的演説に耽て居る間に、死の宣告が可決される。

未來哲學に戻ると、吾人の此一般的精神は屢々強固な倫理的主義の形をとらんとした幾分か低い纖維的實際主義の如く是を知らん

とする傾向が有る。實際主義は宗教的精神に對して特に同性で有るかくて形而上學的微生物に依て甚く打撃を受けた時でさへ此宗教心は其實際的主義を着目して常に神學をして歴史的經驗的基督の福音を實用的に且有益に保たしめて居る。普通的な宗教的想像力に對する實際主義の最近に悲しんで居ることをウイリアムジエームス教授は恰も之幾萬の無數な第一適例の鋼を濾して最も強く世論に訴へた。一宗教、是が働きは街上の人の愛する期待物で而して「働いた事」は一般の最も直接的印象主義者の意識の中に解されて居る。こんな事は救世軍士官の事で思想家とか教師とか認観性が生命てふ裏通の親切な害を及ばさない夢想者の如くに善心的寛容である間は、醫師の如うな傳道師であり且貧民窟の神の子は一般に聖者らしく英雄

らしい形を拱いて居る。然し一般化した實際主義から見渡すと、一時代は「利益の急締復に對する強慾」を愛し、堪へられぬ思想運動は唯だ哲學教授の内密的慰みで有る如くに思はれる。吾人は一系統の不變性たる故を以て其宗教を信じ其を保證するより多少あり嚴肅に實際主義を得んとする傾向が有る。だが實際主義は一つの體系より寧ろ哲學に於ての絶對想念の批判説で有る、で勇ましい試は不可知論の不可側から是を脱せしむる。されば此力は思想家の鋭利な評論の中に求めなければならぬ、此思想家は絶對で有るばかりでなく是で吾人は自然に對する明白な悟性に達せんとする、かくて哲學者が都合のよい時は心を補て居る間に人間は判断とか作用を中止し且待たんとする忘想を有利的に攻撃し、又勇ましく襲はなければならぬ。

然し哲學は混亂し茫漠苦痛或は「當惑」の如うな、亦たは「廣く漂うた」或は「宇宙的天候」の如うな大きな過程としての世界を觀て。此宇宙的天候は一つの物象であるばかりでなく此物象は無政府主義者とか破産精神に對する「働」であるとし。更に客觀的基礎を發見しない是に對する善とか神とかを信向する、なせかど云ふと是は信するよう善で有り有效で有り「助けになる」かである。

是は失望の助言で、新らしい望有る時代に向つての復合的叫びでは無い。更に實際主義の發達の如うに未來哲學を考へられる、此趨勢の代表者としてのオイケン（オイクン）の要求は不思議にもまた當然で有る。されば事實の意義としてオイケン（オイクン）哲學の眞の方向は實際主義との比較を誘ひ出してくる、——即ち是がオイケン（オイクン）の活力主義であるのだ。——

だから疲れた精神は不完全に同化した系統の中を自然の儘に翱翔した後ち、弛んだ筋肉の牧創性、オイケンに頼るより外に求む可き人は無い。

再た、主意説は信仰を權護し且つ推薦する宗教的不安な心に對しての特殊な屬性の實際主義の方向である。哲學に於て偉大な道德的運動の中に存する意志は道德的第一主權であることを確言する。が斯く辨解する人は此鏈環が未來の心盲的哲學とか神學とか々集合した中の連鎖となるような鏈環であることを知る。然し寧ろパウルセンとかシグワートの其卓越した道德的運動の如くに、斯な人々は此哲學をシヨツペンハウイェルの架空的主意説より少々な形而上學的主意説の如くに解釋した。だがかゝる人々は千八百四十年から千八

百八十年迄の間、意志は主知主義の擾亂場厓に諸君主が最高の國を建設せんとするばかりでなく崇拜に對して人類の自由を遺した道德的積極主義を例とし、不可能と云ふことを除外して宗教を建てんとし獨乙人の心を刺戟した古ヘゲール學派の反働に反つた、此宗教的運動は執着的實驗の批判的運動量であると斷言する全然な有効性のものである。また、オイケンは幾多の人々に依り主意主義者の如くに要求されて居る、然し彼が主意主義の否認は明白とか語勢の中に期待するようなものは遺さない。

だから、思想の歴史に新らしい消還の日を指す、遙か彼所の丘の上に光る淡い光の如き射線は果して何であるか。第一に最も一般に、人々は人間の精神的、生活、を好む如に近代の文明とか開化に深い不

満足を持て居る。吾人は此「多數の人々に對する幸福」の喜びとか退化、癩癩の美しくしい實が成つたので道理としてのマンチエスター論から受けた有益な反對を通過した。だから大度な情操は人格的人道主義とか利他主義の名解から最も大きな最も現實的公衆道徳の名解に變化し、今日實在してゐる貧民窟とか労働者の休息室の中に立派な心勇ましい精神を注ぎ込んだ。今日迄で社會的良心は變化し、且つ打消した一般の生活状態を覺醒させ、また物體は最も急速に、且つ明かに「働く」と云ふことを飾つた中に介在する一般的實際主義と一致した。吾人は正しい現出であり——勇ましい現出である——人は性から是に對して精神が生きた神を求むるよりも強くパンの爲に現實を求め且つ鋭く訴へんとす。而して是人間が「單に考へ且つ遊ぶよ

り人は「闊膽たる英國」を進化せしめ且つ英雄を造れと説明して居るのである。

吾々が労働とか不特典とかに對して無感覺とか不仁とかの上に来た近代の進歩とか文化とかの熱心な和解性は人間の精神的生活に對して此最も廣い意義の上に其名解を引出し不公平とか損害の告訴を嚴しく追加して居る。吾人は遅々と陳腐した信仰を教はつて居る、是は精神的の肉或は財産に對してあらゆる殘酷な作用の中心的罪惡であると共に中心的苦痛である、また其舊臭い信仰はヘロドトスが潔白な者を虚殺したのは罪ではないとした是れ即ち崇高な思想は大きな白鳥の如くに人々の心を通ると云ふて單に個々の精神の中に消へて仕舞ふ如に言つたからである。吾人は級歩しながら平凡の本質と

か消還し得ない教化、文化の俗性とか無情とか亦た架空的美學の心髓の野卑な自義とか服在した好色性とか俗な、便宜的な道德性の遇弄的感化とか亦た是は眞の倫理を威赦しやうとするのとか基督教の保護者即ち進歩の精神的麻醉とか風俗壞亂的必従とかを見に來た。かくて此基督教徒の觀察點の新らしい評價に神學校の講座から哲學者も科學者も論文家もまた小説も相次いで遣つて來る。だが人々は到所に虚偽、矛盾、巧な且つ工夫の善い教化の精神的破産を感じた。今日ニイチエは鋭感な印象主義者として彼の精神は内的生活の後を追て是を動的に探求し且つ神經的に盲索し、そうして虚偽の亂争とか缺點の多い價值の下に埋つた害とか個々の鋭い稜を漸々に減らす自覺的修鍊とか誹謗的修鍊から退いた。だが不治の神經病

は彼が背反に對して疎い大目鏡の如な感覺性を與へた。亦た彼が主觀的主情主義は肉の完全性の成就に落ちた、更に其背反は其物本來は崇高なものである、そうして多くの非難す可き點は最も缺點に富んだ意地の悪い門徒に歸するのである。今フレツドリツヒ、マイヤの悲しい聲は現代の肉的不穩の説明であり且精神的缺乏に應じての憐む可き小さな精神的満足を説明して居る。またこれに反して勢ある事實の聲、慈善的人格を有するウイットネを想ひ出させる、此基礎的な人は唯だ羊分理解した進歩の自作的搔物の前で驚いて冷愴性とか主理論に夢中に頼る——されど現時を戦慄する教化された人の如に戦慄はしない。そうして實際彼は神の信仰を経て勝ち得んとする彼の心を見出さなければ此進歩は彼を奴隷し且つ粉碎するのである。

メーテルリンクは吾人が地平線の上に静音、打震ふ聲の光、未知の善、深淵的な生命、消去る思想、内的美の不滅な和語を聴かんと生命を呼ぶ無益な聲から銀の如な音の中に吾々を呼び反へす。されば學校の空談から何處にも青い顔をした物人の精神は自己の渴を醫せんと毎朝群がる確實の貯藏所に歸らんとする。是と亦た相對してチエタートンは叙述したのは人が政略的會合に行き談話を交へる中に思潮を概活して居る、殘忍の如に扱はれて居るマンゴアの住民が暖和に抗議をする所である、そこで彼が頭にシルクハットを戴いて手に傘を持ちそれから科學者の會合所へと道を急ぐ、其所で彼は自分等は殘忍であることを證明する爲に精細な講義を始める。然し總て聲はオイケンの其より更に莊重な且つ嚴重な中に存在しない吾々

進歩の矛盾とか不實在に反して擧つて居る、また此人は苦痛よりも更に善くない吾々修養の外的虚飾が後に潜で居ることを知る。して彼が精神を説明する長い特性的行爲の中に——特殊な出發點に於て此進歩は精神的生活の要求に一致するばかりでなく全體としての其進歩は斯な要と戦ふ幾多の學說の中に存在する。吾人は次第に増して來る苦痛で以て廣い擴りと種々な物象との間に存在する重なる働は生活の周圍に、亦た中心の全然的空間に於て爲さるるやうに感ずる。時に吾人は生活の内的觀客を徴すると生活は唯だ騒がしい慣例や壓倒性であること、人間の競争、人間の誇り、人間の努力は相互に優らんとして居ること、限りの無い功名心と虚榮心は個々の特性的であること、一般の人々は斷へず彼所此所へと流れて居ること、また

は未來に嚮つて歷して行つて居ることや或は一般の人々の力は激變的操練をして居ることなどを知る。然し總て是を通じて吾々は生活に眞の價値と云ふ空の上に到着する。また此空は精神的に心を崇高ならしむるものである。是に因て吾人は生活の意義と價値を見出すのみならず結果の單に巨大なことは道化に化して仕舞はんとする此教化の中に示されて居る。誰でも差異と大なる勞作との間に存在する之の反射とか普通とかを考へんとする、之の生活の本質に對して附隨的利益を費した大きな勞作は小さな人類の權威から完然な消極作用とか絶望を迫るか或は生活に對する價値と遊離せられた人々を保證する新しい學説を探すのである。然し此意志は人々に肉の連續の探求を再び始めよと迫る。

近代思想の他に意義を示した要素は宗教の眞價の永久的生長認識の中に發見されて居る。ウィリアム、ゼームスから此人の哲學正義、神に夢中になつた精神の奪強は痛く心を苦しめる誘惑である。そして其人が心理學校と實驗室での重い地位から奪ひ取られた宗教的經驗は宗教の自治的心理に亦たオイケンに對して推動力を與へたのである、此オイケンとは人間の全體精神的な生活で以て實驗的に同擴の宗教を造る、また宗教の哲學的趣味は唯だ保護の國から、更に同情的評價の國から其自治權とか無比とか云ふ謙遜な且つ嚴かな認識に伺て動いた。また、アンリ、ベルグソンは、更に彼が哲學に冠とも云ふ可き宗教の最も望みある論文を吾人に與へた。亦た此論文は彼が直觀の評論の下に鳴り響く水底に沈んだ鐘の如な第一精神に斷案

を下した様に彼が生々とした現實並に光輝ある光明であるほどの、また廣い公衆の避難所である。またフランス、ゼームスの種々な宗教的經驗の中に是を意味して居る、そして未知と生活的接觸の上基礎を定めた新基督教の辨解の暗示と信仰に對して大きな公道を有するベルグソンの直觀の教義は共に新公論に先例の無い程刺戟を與へ、非常な神祕家の新しい研究を鼓吹するばかりでなく形而上學的興味を喚起させる。基督新教徒の國、獨乙とか英國に於ては著名なオイクエンの宗教の評價が有る、そうして特性的「絶對的宗教としてのまた類に應じての基督教は教會の内外を経て最も有力に實を結んだ。だが、オイクエンは基督教の現在の組織に常に無い根本的に完く論服した評論をやつて居る中に評論の素要、永久の富んだ世界の

思想即ち斯な人間が先例の無い勢力と自由とに對する精神生活を起した耶蘇の教を重じ、近眼の如うに充用したことさへ示した。そうしてデスカートは哲學的思想の中に存在する最初の要素は普遍的精神の宗教的熱心で溶解せらるゝのみならず常に消還の中に神學的趣味で溶解せらるゝと云ふ時代はなさなかつたと云ふほど多くなかつた。先づ第壹に教會的獨斷哲學の大形而上學的時代は消還の教義に爲つて來るやうに更に傾て來て居る、そうして古い叫び「何麼に私は濟度しなければならぬだらうか」とは古い疲れ時代の穩かならぬ心の自づからの私語である。亦た思想家の實驗的冒險的時代の攪亂された心の自づからの私語であつた。そうして更に哲學と宗教の間に長い、そうして鋭い連結が終局を告て居なかつた時で今は此戰

は近距離の一般の地に進で來た。

さはれ多分現代の激變的な思想の變化の中に存在する最も突起した形象は生長して居る確信であつて、是は眞の理知に依らない實在に對する經路である。今日の思想極智識の問題は相接合し泡立ち波立つて二つの渦卷が明かに語つて居る。一個の物象は幾何に他を知り且つ自由の問題を知つて居るか、幾何に人の起因又は信賴する如うな目的は其智識の可能性の物象の中に存在する必然の要素で調和されるであらうか。自然主義は潔白な死んだ掃除人で漣を拭ひ去り、かくて必然に憚からず讓つて仕舞つた、そうして少くとも鋭い適合性に屬する成功の臆定を成就させた。そうして主知主義は論理的自由の表示に依て決定論の鐵棒から人間精神の中に放免せんと勇ましく努

力し、亦た主知主義は此論理的自由を監禁から專制主義の中に引渡さんとする。是は精神的起首とか道德的品位の損失の故で吾人を遣て行つて仕舞つた。此精神的起首とか道德的品位は此過程は機械的或は理知的の過程の如うな世界運動を考ふる種々な系統の適合した承認の免かれぬ結果である。ヘゲル學派の風潮に隨た反動の中に唯だ信仰の概念から移つた人間の思想は論理的系統でもない機械觀でもないまた陰影でもない物象でもない、然し精力エネルギと意志である生活に次第次第と凝集して來た。そうして若し吾人の哲學が意志か、精神としての生活の哲學で有るならば認識問題の正しい解決は自由の問題の實際的解決の中に包まれて居なければならぬ、換言すれば、吾人は認識の中に道德的發端を認め、近代哲學的働は自由の國に横つ

た真理の確信に依て生まる、かくて、其國に論理學の材料より必要な探險家に必要な或物を質ねに行く、だから彼は自己の求むる真理の如な自由精力と天然の精力の翼を必要とする、即ち彼が求めんとする真理は——生活の道德的感情的自己確言である、故に意志には真理を信ずる意志の種類さへない、唯だ心は幻影を見んとするばかりでなく創造的價値に對する精力を知らんとする。

此のドクトル、エフ、シエ、エス、シエーラーは決して唯だ騒ぎに騒ぎ廻る哲學的空威張の未塾な評論が作るのでは無い、此人は吾人の倫理的價値の系統は吾々推理の前提を決定すと云つた、吾人は真理を知る爲には善でなければならぬ。オイケンには他に依る不公平の一組織を復置するより多くをしらない主意説の疑ひに對して自づ

から保護して居る、かくて宗教に對して思辨的基礎の安全を求めて居る間に更に彼が真理の認識に對して第一の意義、其要求、人間の生活に對する態度を主張するのである。ベルグソンの直觀的批評は恐らく此道德的運動の潮に對する最も力ある支流で有る、原理の中に理知の理論的權威を要求する、論理は實在の世界、事實の世界に何が可能で有るか、何が不可能で有るかと云ふ事を吾人に語りしな

い。吾人は物質的宇宙に於て吾々の道を發見ことに依て手段に對する心を落す、ベルグソンは知らんとする目的に對してゐるのだ、處置せんとする問題に對して人の進化の中に工夫したと云ふ。だから構成的唯物論者の重要な人である。されどそれは唯だ心の進化しなかつた力ある能力の中に眠るであらう、亦た、意志に對する統一した

實在で經驗の大海に跳び込んだ、其は人間の精神的生活に對する貴重な價値の多少の實際的認識を受くるだらう。換言すると、吾人は意志とか理性とかの統一から起つた直觀上の實在の吾々が眞の認識に對して關連して居る、然し直觀的理知は其眞の王國の中に來て再生するであらう。

いかに、かゝる近代思想の三大要素はオイケンとベルグソンの哲學の中に彼等自身なることを想起させるか。さりながら斯の如き大思想家の感化は幾何に大なるか、クリスト教徒の精神或は未來の神學に對する助けとなることは次章の中に論じやう。

はたして、
下等な理解

第貳章 ルドルフ、オイケンと精神

生活の哲學

最近三年以來除々として遷り行く英國思想界の地平線にオイケン博士は破れた、是には多少學者等が不満足に敬意を表して居ると云つても、思ふに一般の爲には急激に且充分な敬意を喚起したてはなにか。多少束縛された最も聰明な人々は彼を確く信じた、之は彼が後に幾年と云ふ開拓豊富な働があつたからで有る。時に獨乙の哲學的思想は超越の中に現はれ古いヘゲル學派の反動の水槽の中に沈で居た。而して自然主義は其未端を磨滅し滅失し始めて居た、かくて攪亂された精神はジョッペンハウイエルの厭世主義やマムテの積

極主義やニイチエの主觀的主情主義と望み難い程一致せんことを求めて居た、之で生の満足な解釋に窮々として居たのであつた。斯くの如くしてオイケンの精神生活の哲學は思潮と一致したのである。自然主義は一面には心理的感性並びに心的筋力の信じられない程野卑なものを生み又他面には殆どヒステリ的の懷疑説を生んだ、かくて自然主義の衰微時代に主知主義は辨證的小主人公の收穫を得た、そうして論理的範疇の解語で解せらるゝ非常に面白い宇宙問題を道德的亂視眼で觀察した、そうして思辨的思想に對する不遍的信仰の假衆に依て哲學を生に對するあらゆる關係以外の「專問的競技」に落した。然し斯な無神經的思想状態に反してオイケンの經驗的、作力的性質は一般の意識に強い刺戟を與ふるのである。彼は哲學的混亂とか

時代の疲勞れたのを一見して、唯だ理論の系統的より更に定限的な歴史的運動を根本とした生活の有様組織——即ち敵意ある世界力の戦ばかりでなく理論の衝突とか對抗系統の争ひを見た。此術語學の變遷は彼が世界の作力的觀察の實際的心髓の意義である。

オイケンは千八百四十六年東フレシアのアウクツヒに生れた、そうして最初に彼が學校の先生の一人ウイルヘルム、ルーテルに一番長く宗教的印象を受けた、ルーテルは殆ど忘れられたが哲學者のカ、チエ、エフ、クラウセの有名弟子で、他人は作力的哲學の人で所謂るオイケンの本當な指導者を作て置いたので有る、それはルーテルの哲學的教化ばかりでなく——亦たクラウセから受けた教へもあり且つ斯く早く、深く印象を與へられた——ヘゲールからも受けた。是は

彼をして宗教の問題に深い經驗的興味を與へたよりも寧ろ斯様な問題を哲學で以て結束せしめたのであつた、此哲學は嚴重な正ルータル派の教師がこの幼い小供に力有る、永久な感化を與へた。彼は其後あらゆる獨斷的因襲と遠ざかつて仕舞つた。最初彼は大學生でゴチンゲに通て居た、それからベルタン大學に入つた。斯うして居たオイケン人は人から聞た事よりも耽讀した本の感化を受けた方が多かつた。ロツチエは彼の無力な心を心酔する程落した。他の方ではテフヒメーラーがアリスト、ルを研究する様に導いた、そらして全體としての彼が系統に執着して居る間に、トレンデンベルヒは自己の思想の倫理的性質と哲學と歴史とを關聯させんとする努力とを以て深い印象を與へた。オイケンは大學を卒へて後數年の間身を教育界に

任ねて居たがスイツル、ベルツ大學の招に依て彼地へ、轉任した、それから明治七年頃二十八歳の時獨乙エナ大學の教授に任せられ今日迄講座を開いて居る。

オイケンが此大學の教授に任せられてより彼は始終生徒の精神を生活の純い慣例の中に引入れたので終にこの少な大學町には特性的な解釋し得られぬ程の魔力が満ち渡つた、エナは文學とか哲學の布に織込んだ想像の器も著名な名てふ過去の遺産を受けた。是でウメルではシエイフとゲータが戴て居た榮を分けねばならなくなつて來た。中古文學的運動はセゲールの研究者に對する研究所を作つて例も此運動に密接な關係の有る哲學者等に教へて居た、がセゲリンとフイヒテは近代の無神論の執迷家の懸念と一致したそこでエナの塵

は彼がベルリンの方へ名譽ある經路を續けて行かうとする足に振ひ落ちたのであつた。エナの自慢は取圍んだヘゲールの中心となるがヘゲールはナポレオンの同感を表して自己の驅逐されん事だけをまぬかれて居る。晩近のエナーの點呼の聲はクノ、フイツセル、カールハーセン、リチャードブクジウスト云ふ斯な名を含んで居たが目下では國際的に尊敬されて居るヘツケルとオイケンとの二人の名に別たるゝ様に成つた。

現今オイケンの實際的名聲は全世界に亘つての歡喜で恐らく獨乙の他の哲學博士にして斯く迄世界的子弟を有するてふ誇を持つてゐるものはあるまい。氷洲の様な僻遠な地をも合した地球の端々からの學生は唯だ一人の大哲人の足下に群集するのである、かくてオイケ

ン理想主義は具體精神的經驗に對して努力して居る全體に對して哲學的集合地として供せらるゝのみならず其の特性的に且つ不滅的方法にて教ふる其人の感化を一層強くする單なる吸引的仁慈の人格の現示を認めることが出来る、彼が多くくの學生と共に學生生活をして居た頃羅馬教の少數を添く外ギリシヤ教の信徒をも含む宗教聖教の大部分と共に生命に對する總ての體度は著名の士の内に數へられて居た。オイケンに關係ある英國の學生は常に幸福を得るのである、又オイケンがアングサクソンと非常に深い因縁の自覺力あることを認め得るのである、今日に於て彼が感化は日本に迄及んで、最も著名な著の日本語の翻譯さへでき近代精神的觀念に向つて高尚な精神が働いて居る、有名な國から學生の今日迄より激増してエナに訪づ

れつゝある。千八百九年にはオイケンに對してノーベル賞牌の審査があり彼が著書の翻譯に對して力ある刺戟を與へた、此ノーベ賞牌の授與が有つて以來オイケンの流行時代となつて來たのである。

オイケンの働きは自然と二時代に落る——變遷時代に依て分離された歴史的構造である、最初のは彼がまだ少壯時代に研究したアリスト、ール哲學の研究で「哲學的術語學の歴史」又は「現代の基礎概念はその最初の形である。此後卷は概念の内に働いて居る思想の長い過程の結晶で最も徹底的な光輝ある分析的處置を發見し得る。而して此本は彼が自づからの哲學に對する自己の特性を表はした序論である、變遷の多い時代は此書の第三版「現代の精神的運動なる新表題」に依つて示されて居る、亦たオイケンの理想主義に反對した性質の表はれた

反動は是が證明して居る、此版に有る評論的議論は明白に豫言を與へた、そして彼が名と共に集つて來る新理想主義の基礎的確信に對し世を信服なさしめた。吾人が心に最も通俗的な吸引的な二時代の間の最も必要な結錯はプラットンから現代に至るまで大思想的に依て觀察された様な「大思想家の人生觀」の中に見出すことができる。——是は殆どオイケンの古典として後世に傳はる可き著作である。何となれば是は徹底した説明、魔力の如な表象と感賞せずば居られぬような獨特な判断に依つた精らかな思想の集合地であるからである。組織時代を含有する「精神的生活の統一」は常に序論の一卷を含み、具體精神的騷動に對する戰「人生の價值と意義」「人生の基礎と人生の觀念」即ち近代人生哲學の基礎の如きは今日迄宗教問題と共に亦た特殊部分け

た、「宗教の眞理」「宗教の心隨」「現代に於ける宗教哲學の主要問題」と最近の「吾人は尙基督教徒たり得るか」「具體精神的經驗に對する手」の如きは恐らく最もオイケンの哲學的特性を啓示し特質を表はして居るものは有るまいがそれと同時に「人生の基礎と人生の觀念」は苦心努力の遺が見へる。だから彼が主義の徹底せる理解力に對する最も重要なものなるのみならずそれは神學の趣味を以て常に讀者に對して特殊の價值を與へ、眞理と實在觀念の最も光ある議論で有る。「精神的生活の統一」はオイケンの研究に對する基礎的な本で有つて、「生の意義」と其價值は修養された精神に生の問題に於ける活動的經驗的興味を喚起させんとする最も成功した結果を表はしたもので有る。こんな本の中で宗教哲學に獨特な紀念的の著書は「宗教の眞理」で、オイケン

の性質を示して證し且つ問題の見解の内に確實な洞案を與へその最も進化した形の中に宗教的哲學を含で居る。自分自身では略説した一般的な主なる問題に對して「力強く言ひたい、なせかと云へばその暗指的語の特に豊富で有るからである。彼が最近の書吾人は基督教徒たるや」は又別に面白いオイケンの自身の獨斷的、寧ろ非斷的思潮の上に溢切つた光が漲つて居るばかりでなく獨乙の現在に於ける宗教の思潮を説いたからなのである。

人々は最初オイケンの博士に接するに聊か温和な顔より比較的素朴な様子をして居る事が目に付くであらう。さればベルグソンに對しては甚しい對照で、ベルグソンは接すれば忽ち魅せられる程で畏にでも羅る様な立派な天才だ、オイケンが解釋の麥畑の中には次に羅

栗畑が無いからして何麼しても、オイケンには氣質の色合もないし、言の音楽に共響する様な調色とか韻律も無い。其はシヨツペンバウイエルとかニイチエの様な讀で行くに從て欺惑を起させるものに耽つたからなのである。亦た彼が有する處の幾多の欺惑的精神とその殆ど新聞記者的な觸覺に對する光と印象でそれは現代の快樂派の人の心に期待されたばかりでなく再びそれはソクラテス的な反語と素朴はソーレンケルチガルトに於ける彼等の近代の摸範物として觀ることが出来る。ところが彼のスタイルは最も確實に知つた事を莊重なそうして慎重な辨舌と、同時に高い處の高貴い説伏せる口と又よく調べた世論に訴へ或は促し、彼が思想を導いてくれて立派な、高價な導子の様に觀られる。嘗ては強い不變な、始の印象が歴したが

其印象は彼が思想の蔭に適當な著物として現はれかくて其織物の中に多くの美しい花絲が織込で有る様に見へて來る。

歴史哲學と哲學的先見に於てオイケンの立場を觀察すると、最も深い感化を受けたプラトーン、アリストートル、アウガスチン、フロチニウス、カントやヘゲル等をオイケン自身で記して居る。だが、此の名簿の中に勿論吾人はフイヒテールを加へたるのだ、何せかと云つたらフイヒテールには彼が深い親縁を有したからなのだ。彼がアウガスチン論は高度な哲學的鋭敏な觀察的で記されたのみならずアウガスチンから得た人格に對してあからさま包み隠の無い驚感を説て居る、さうして始終全心彼は苦心努力して居る生命の大きな永久不變の問題に強い力を得んとし強い靈感インスピレーションを得んとして居る。恐らくは

彼が思想に對してアウグスチンの感化は反動の爲に起つた優勢な否定運動の様に叙されるので有る。然しオイケンの自由の解釋に於てアウグスチン派の教義の恵み或は宿命の熱心な評論的研究は神靈とか人類の組合せの如き靈的動作の概念に於て斯の如き同感を叫ばせしむので有る。茲にプラトリーやアクストールやフロチニウスの感化は細かく説く必要に有るまい。自分が摘出したのはアウグスチンの事でオイケンが一般の問題を神學に移すに當つて心から歎待した事を説いて見度い。またこれと同時に主知的組織は神學を入れようとはしなかつた、故に吾人が生活の哲學に進まんとする時に當つて先づ第一に其關門で研究的精神を打破られて仕舞ふ。是に反してオイケンが早くも哲學的先驅に到着したのは、總て近代思想家と共

に、カントの基礎的要素の教を受けたからで有る、だがカント派の教の内面實驗の現象的性質には大なる疑問が横たはつて居のと、時代の要求に依つたのだと觀察する事が出来る。彼はヘゲルに關しては幾多皮相的因縁と塾知的三つの立脚要素を知て居た事と、歸重、こは彼が否定運動に加へて實際に存するより遙か深い現象を造つた。實在に關してはヘゲルに全く反對の例の少くとも三つの基礎的立脚地に立つて哲學的手段は彼が精神生活の活力的概念と彼が歴史の評價に於て異て居る、フイヒテとオイケンは深い因縁を有して、彼が古い個人主義と古い主知主義と神學の確信は彼をして實に研究の深きに至らしたので有つた、然し彼等が特に實驗に對する尊敬的態度と宗教に對する觀察に於ては再び此所彼所に分離せざるを

得ない困難が横て居た。然るに、オイクエンの哲學は古典的概念の活力的筆法を發見した丈けに語勢の強い事の様に、亦た一種の新らしい物より寧ろ新研究として記することが出来る。亦た其の進化の各點に於ても彼が創造的斷案、そは最も偉大な彼が先見に對して開拓者でなければならぬ様に見なされ、新理想主義の首唱者とされる。オイクエンが勝を誇つた表示、此の新理想主義に對しての苦心努力の最初の觀察を得んとする十字架の錯雜した問題は進化思想の主要の論據を理解した如き自然に對する人間關係の研究から有用の出發點を得る事が出来る。

フラトールやアクストロールがギリシヤ人に啓示した様な自然は單に神の感動しやすい事ばかりで無くて、誠の範圍に對する神の教の

靈で有る。此の神の力の指示した處は自然に於ける生の存在を助くる處の人類の精神で有ることを知ることが出来る。又神には精神を支配する斯の如き法則の不滅な理論の反照を探求することか出来るだから基督教の自然には實在する神の發出と神の鏡から創造した虚無とか靈に對する不滅な或物、單に「物質」たる物の階級に落ち入らしむるのだ。即ち此の意味を啓示したのは、一面に於ては失落てふ神祕的な快態や美や驚嘆の覺性が不朽のギリシヤ文藝を造つたので有る。亦た、他面ではこれが靈魂に對して安全ならしめた、そは不滅てふ雙び無き意識其物に對する復活で自然に反しての其不滅なる物の斷言はその自然には精神が生活するのだからこの世界にパンの不足を感じさせる、其は即ち自己確説とか自由動作とか創作

的進歩等に對して造たもので命題近代思潮の名辭に於て科學の進化てふ物を以て問題を新らしい形象に論及せしめた。先づ第一に科學は自己の法則に依つて所謂物質的過程を説明する内容で有り而して神祕的な人生と思想の間迎は前に解決を止めんとする併し遠からずして吾人は既に觀たとする様な物を、自然主義の侵害に持來らしめた、其はその法則と組織に對して實在のあらゆる形態を受けしめ、而して大きな齒車の中の小さな一本の齒即ち人間は自然の一部分となつて來るのである。それと同時に機械的過程の碎破力の破壊から脱がれんとする隱場の如き神に於ける古い保安は神の概念作用の新らしい評論主義に依て振り放された。で遇像的な抵い神は疑神した自然より少さいのだと云ふ事が分て來た、だから精神界の神即ち超

越した神は思想を避け思辨の壓迫に依て稀薄な大氣の中に消去つて仕舞つた。さればかゝる問題は精神生活に對する自由を擁護するに如何に苦しい組織をとつたが「何處」して「事實」に叛て自己有機の精神生活と自由に對して一つの確證を發見し得るか、是は吾々に對して精神は分離する事の不可能ように物體に執善して了うとなしたからである。其の法則は自己許認的で總て主觀的であつたと云つた。であるから明に其は自然主義に對して讓るに易い經路で有る、且つ又概略で有る。されば其の自然の使命に唯だ一つの優長な默縦が必要で有る。又其の不活動と不動作に對する遅々たる然かも結合とか平凡とか無感覺とかの溝に精神を確着せしむるのである。而して思推する、に吾人は一つの理論の機械的な證明に背ひて幾多の「正」を求め得るだ

らうか？吾人の有在より他個人の不満とか個人の自我とかを求め得るだらうか？名譽を有する主知主義は主觀主義に條件を定むるに有らすれば自然主義に反するのである、故に主知主義は亦た吾人が觀察した如く論理に對しては主觀とした生命なので有る。而して思辨的要素に對して實在に歸せしめたことは唯心論者の「事實」の如し全く動かされぬ事である。其は原因から。働きに對する思想の組織に因て宇宙矛盾の復構を見出さんとして疲れた精神の働きを表示するのだつた。言葉を換へて言ふと、勝利を得んとする和解は理解に依たもので。併し吾人の此の矛盾的實在は其の路にて平和を見出さんとする吾等の精神を許さない。何となれば其は活動的であり亦、創造的であるからである。故に原因から動に對する要求には

化せられぬのだ。例も吾人は考はんとする毎に吾人は彼女を髣髴たらしむ、其女は吾人が知的抽象の非なるを證し脱るゝに依て彼女が活力的創作力を證明するのである、そは生の自由と無數の生命の運動に對して畢竟吾人が極限的觀察と平等した極限、心的可適合の結果である、だから斯な主知主義は、しかも自然に對して創作精神とか卓越とかを勝利的に斷言し、其精神を空間に置き錯らしむるので有る。此の問題の解決は唯だ觀察の一點である。また是に外ならぬ。然るに是は意識世界の獨立實在と精神生活の聯關とに對して正義を忘さしめ、精神が自然の働作の中に沈まんとするを拒み、而して其の獨立と創造の生命を安全にせしめた。

オイケンの解決は今日では最も活力的で正確な様に問題を現代の

最上の精神に許へ、而して彼が具體的理想主義は社會に入れられ、總てかゝる構成的動に對して復合點の如くなされた。自然主義と主知主義との相反して原子を観察すると、彼の評論は雙無き徹底力と力の現はれて居るばかりで無く、其は交感的公平明寛を有するに依りて彼自身の自由の原論を以て彼が實際的徹底を啓示して居る。オイケンに研究するにオイケンの相反した二大原子の實は彼の思想に對する最上の可能的紹介で有る。されば研究する人々は先づ第一に「精神生活の統一」に向はねばならぬ、こはギブソン博士や幾多の人々の考ふるところなのだ、随つてオイケンの哲學に對する廣い道なのだ、そこで「精神的實驗の戰」は同主題でも、其所には又非常に顯じ異つた経路が描かれて有る、精細な觀察に基て相對原子を通つて、其は字

宙から人格と排斥自由に一致して居るのを示して居る、オイケンは抽象的原論の一致を拒絶し其は二つの理論（一過程は勿論反對調和を退く）又は、彼自身の還元法を應用して人格の統一原理を知ることができる。一面に於ては自然主義に反した如く、そは絶對の價値を有するもの即ち神に直接を與へたことに依りて精神の實在を安全ならしめ而して人間に依りて現實された様な最高な精神生活を含ましめ、超人の檀有と其を實現せんとする眞經驗の（肉面的で無くとも）伴隨に立つた、此學說日中にて吾人は主觀的精緒にも有らず知的抽象にも有らざる精神的經驗の概念作用を得ることが出来る、之は主觀的精緒に有らず或は知的抽象でも無い、されば畢竟生命と動作に外ならぬのだ。又他面にては主知主義に反したとして、彼は空間に於ける精神

機能を作らなかつた。即ち其の空間に於ける精神機能其物が實在意識の世界にその迷惑とか徹底とか變體とかに依て動いたからで。彼は自然過程に對してその意識の世界を服せしむるのでは無いと云て其をカント派の「本體」意識では自然を超へた様にも思はれて居ない。然れども其は同時に實現された意識の世界の如く考へられ而して其の自己現實化した事に對して是を利用した。又世界の能動力に對して原始的の人格並びに自由を主張せんとし或は辨明せんとする是は思辨哲學ばかりでなく道德的冒險で有る自然の過程に對する少垂下に吾人の人生を作るのであるか亦ヘゲル派の神の生活に押話を押出させるので有る。神勇的な十字軍は總て昏睡とか平凡に對して不滅肯定の情緒的斷言で有る。そは考究と條理で有る、故に亦信仰で

有り且又冒險で有る。吾人は思想が其の完成せる働をなす事と總て自由とか創造的精神生活とかに關して敢て行ひ且つ冒險せねばならぬと云ふ事を知てるのである。實に、吾人は賭事に危険を冒さねばならぬようになつて來た、されど有名なパスカルの名句に依て慰めらるゝのだ。此は勿論意味を成さないが其はオイケンの哲學が思辨的基礎に缺て居たからである。然し實際上に於て其以上の大思想家を求め、あるより以上の大思想家を求め且つ充分な理解力有る人を求むると云ふ事は困難な問題である。彼が分析は各向の實際的程度に基づいて働いた最も鋭敏な理解力ある分析で有つて彼が構成的働は莊大に建てられ而して最も拂て接合されたのである。だから彼が哲學の眞意は精神的冒險で有る。隨て彼が頁の外には大きな人類

の問題の暗黒面に突入る光が輝て居る。かくて其光は人生の抽象眞實ならざるを得ない。だから不滅の生命は神の能力で有り且つ精神の擘懂と色險な要求で有る。吾人は今オイケンの精神の様々な光景から中心觀念の如き個別的存在を取りて是を飾らんと試みよう。

第三章 個人主義より人格への否定的運動

吾人は個別的に微々たる主我主義者の勢力の小さな範囲内に密集し始めた、之をば吾人はあらゆる人格とか神との共働者としての結果と呼んだ、而して此精神的退去は「否定的運動」を経て立脚地を定めた。是にオイケンは塾知したヘゲール學派の三時期説の組織を適應めたのである。(一)自然時期、此自然時期の中には生命とか便利主義とか便宜とか意識の権力の下に生て居る、(二)否定時期、之には個別的斷絶と自然的人生とが絶対的精神の生活に近寄て來たのが含まれて居る。(三)復構的時期、其中には精神的自由を受けたこと、オイケンが自分の上に宇宙問題を持て來て、之を新らしい光、精神的組

織の力を與へて古い世界に還すことである。然し茲に類似的結果が有る。即ち神は神自身に還るといふ氣拔けた平たい想念に歸着させるかわり神を人間が今まで叫んでも反響しなかつた寂しい所に消却して仕舞ふこと、吾人は眞世界の眞發動的否定を有す、さればその自由と實在とを否定するところの精神に於ける戦と、また最高な試みに對して其自己の有効性を置くことである、だから此の否定運動は世界外觀の解釋では無い。否、凡神論的神の實在に對する世界の錯覺イリウジョンからの一歸還ならず個別的存在は自然から精神に對しての戦で單に競争場で有るばかりでなく戦場の中の人は戦闘者で有るのだ、恰も人間の精神には生の矛盾を感じる。論理上の謎の如きものや彼自身の生命の問題さへ否定運動を始めた。恰も低い標準と小さな照

準の便宜的觀念と低い内容抵度を超へた妄想の如く或は又個人的自由に對する凌辱の如く且つは精神的人命の敵の如く見なされざるを得なかつた。だが此の否定的運動に至るまでには精神的破壊の全過程を通じて行はれた之は全破壊と並に與料の關な自信に精聯し、而して勝利を保て新世界の力に還て來た。亦た此の勝利は精神的經驗の新しい直接を通して來た。精神は嘗て最も内面に且つ其の實在の秘密的原據に最も甚く反した過去とか壓迫に依て打破せられた。その自由とか效力の確な確信に對して「彼が船を焼いた」全身の熱情で神の消却的作動の力とかに對して感じ易くなさしめた。自由は確に恵の中ウチに存在するのだ、だから道德の働は「神の直接な救濟の内」に其の根元を有す。斯な意識に依る道德的破壊は宗教的覺醒となり宗教の

革新となつて来る。オイクエンの思想は改變の哲學で有つて門戸に於ける精神生活は大相互で有り即ち思辨理論の賛否論で無いが道德的撰擇力は總て人を錯雜せしめた此の撰擇に人格の撰擇或は其物が排斥は其の人生の任務或は死の空虚とか墮性に對して之を引出す、亦たそはパスカルが撰擇した意義解釋に對して眞實で有る、是で彼は撰ばなかつたり撰擇を引延したりした。此最初の「彼か此か」は哲學の特質を表はしたもので有り且つ之は單に經歷とか分析的な人格とはなさなかつた、が生レの分離で有るが如く且つ賞還運動の原動力なるが如く要求する。消極運動のオイクエンの解釋と意識から精神に對する轉換は單稱的光輝と自由の充分な論理學的宗教的辨護を含んで惠とか救濟の宗教的種類の理解的正義をも含で居る。此の精神的生活は

動作の如く考へられた、そは吾人の存在と神の——人間の自由と神が救つた發端との間に基づかしめた償還的過程の如く考へられたからである、恐らくはオイクエンの働の實に往重にして且つ本質を有するものは外にない。儘かに總て反對側を其内に直に創造し並に壓した如く彼の精神生活の概念作用より最も豊富な暗指は外に有るまい。されば自由は壞與とか固有超越とか人格「絶對」等の意を含むのだ。彼が人間と神の消還的組入の取扱にオイクエンは背理主義イラノキクムに接するのだ。「宗教の眞理」より熟知し且つ性質の表はれたる一行を引用せんとす、自由創作外の惠、「自己確證的動作外の依從状態は全解釋を促す基礎的事實で有る。最高状態としての精神的生活は公理的性質を有す」此の究意條件は其生活を否定し難き事實で有るこの生命は内面的經驗

に對して吾人と密接な關係を有する辨駁し得ざる事實で有る、されば人間と神と接觸し入合つた生存の中には幾千とも知れない神祕的な説方で是を證明されて居る。而して人間此の精神生活の力より個人的公理を何うされようかの弱點を考究して償還的運動に力を與へた。斯くて彼は背理主義の責任を遙かに遁るゝので有つた。それは即ち彼が否認せんとする真理は恰も人格を脱離に動かしめ而して總て人間才能の真理は唯だ惠の洗禮を拒みて寺の外に出でた如き啓示の中に調査する事を得る。此の如き義務は正義の確實な觀測を有す。然し背理主義は多分現實より一層皮相的で有り且つ又オイケンの固執的無效考を想はしむるのである。之は彼自身が主知的見解に導びかんとした處で。

オイケンの消極運動の教旨を概括して言ふに下にギブソン博士のルードルオイケン生の哲學の中より立派な句を引證しやう。

自己中心、自己奴隸的個別的存在より中心人格に對する消極運動と意識世界より自己に對する運動は、例へば神に對する内面的自己の存在は直ちに吾々實際的自己存在の救済にして且つ斷言で有る。そは總て自然的ならんとし印象的ならんとす傾向に對して吾々個別的存在の辨護で有る。而してそのものは吾々自由の利益に於ける吾々が信仰に對し缺く可らざる發端で有る。人格の辨護は自由の辨護で有る。のみならず吾人は言つた様に人格の辨護の中には消極運動の眞意義が横はつて居る。積極的運動は消還の世界に存し斯の如き精神的觀念を以て交感と調和の中に入れて行くのである——即ち精神的

觀念は技藝の觀念、道德的觀念並に宗教的觀念である——其物は吾々人格の支持的力より分列して自然の機械觀の振子を振るのである。此の消還的過程は吾々人類の自由と救助的發端と神の目的との中間の密接調和に基を定めた。此の基礎的確信に吾人は道德の統一とか宗教統一とか倫理に對する宗教基礎の斷言とかを持つて居る、是れにより生命の道德的宗教的哲學としてのオイケン哲學が確立されたのである。

第四章 宇宙的人物と宗教理想主義の

如きオイケンの哲學

思辨的概念を経て個別的存在から人格に對する此の變遷に他の進路が有る。是を吾人は宇宙人格的理想主義の如く觀察し、確實な點より宗教的觀念に引入れた。されば吾人は再び二つの中心生活を以て起す、自然生活は小さな範圍を引離して大きな全體の中に埋めた、而して更にあらゆるもの自我的利益とか評價的あらゆる物象快樂の標準とか利益の標準に依つた物を其物の徴々たる物に引證して定約した。亦た快樂とか大切な事に無關係な精神的生活を彼は彼が抵い快樂の奴隸狀態から引離して個別的を自由にせしむるのである、併し

善と誠のあらゆる物は不任意な自然生活の要求に高い結果を追求する、それで之が内面には直接與料の甚い消極作用を含ましむのである。吾人が既に見た如く、此の精神生活は機械觀の名辭でも論理學の各辭でもなくて意義を解される、附隨精神的實在は與料に其自己の要求を引出し或は之を其物の標準に従て復構させる。斯なに含圍的實在とか再構形的實在は自然から全く引出されなかつたし徒に其物の中に支點を有する起動力に依て變體せられなかつた、であるから支配する點は是をば超越して存在するのである。また更に、斯な精神的生活は倫理的確心を含むのである。何となれば之は機械的進化或は論理的必然では無くて自由的意志でなければならぬからで、即ち此の性質は品性に於ける個別的存在で有る。而して更に亦、そ

は個別的存在よりも、世界的で單に「自我」のみでなく世界なのである。何となれば指滴した如く、其は全體實在を包含し共に内面的理解と其の活力的再構を含むのであるからである、また更に、人は自然的で有るばかりでなく精神的で有る、故に總て精神的生活の可能といふことを適應める能力が有る。オイケンの直接態度は意識生活に對する精神生活の束縛で有り、且つ自然から精神に對する直接變遷の小さな新約聖書の様に觀られる。「吾人は再び生れ還らねばならぬ」は彼が常も純い精神を失つた時代に對する強ひ叫びである。此の精神は強い革命的な要求で人間に近づいて來る、と云ふのは彼が空想的な朦朧とした知覺を敢て撰んだからであつて、而して撰擇的要求と確信は撰擇者の微弱な事とか斷續的希望とかが精力の上に立て物

を選んだ即ち撰擇的要求の力有るものを造らんとし感動的なものを作らんとするのであつた。撰擇せんとする精神生活は矛盾し、暴政政治の行はるゝ他の精神的生活の滅びた世界に持續されて行くのである。而して此の生活命は復構を求めんとする世界を超へて或は外に之の矛盾した世界とか暴政政治の行はるゝ世界を植へんとするのである。即ち言葉を更へて言ふと其の世界は生命の撰擇の中に存するのである。吾人は究極實在に對して自づから接續さして居る。此の點に於て之は精神生活の概念を神の概念に引入らしめた、そうして世界的個人を宗教的觀念論に引入らしめた。吾人は長く仕事の量を運び得ない、如何となればそは不平均で有るからだ。即ち仕事は吾々に運ばれ、而して吾人は生長するのは自由だから身丈に何程尺が増すか

との考へから復活した。今吾人は斯くの如き美の觀念に對して滿心の説を以て働いて居るのである、誠とか善は神の中に實現された最高の物だと知られて居る。之は吾々をオイクソンの云ふて居る「一般的宗教」の國に引入れたので其は代表福音的「轉變」に伴ふ喜悅に滿ちた安全の第一の光に其の並行線を有するのであつた。新らしく覺醒した精神は神の確言的微笑に其目を開かしむるのである。あらゆる内面的僻裂性とか全獨離とか宇宙の矛盾の全意識は移動するのであつて。此の異邦人は天國では同國人となる、——市民の内の他國人も下婢も息子も孫嗣も皆な同一である。貧乏な者は富者になつて來る、なせかと云つたら萬物は彼の物となり、又彼は神の子であるからである。また精神は神の世界の家庭に在るからである。

されど是は目的調和では無く。直ちに新らしい憧憬が起つて來るからで有る。第一に全智全能の神と共に勝利の進軍の代りに精神的の巡禮が嚴しい壁と不得な敵で取圍んだ靜かな物すごい狭い路を通りかゝつて來た。自然は精神の威力を殘忍にも無視し且つは基督と云ふ眞の神の上を破壊の馬車を驅つて走つた。此の人間の世界に於ける惡の勝利と無精神の結果は精神の力を墮して仕舞ふのであつた。而して此の精神の内には徳則廢棄論者の更に暗黒な世界並により騒々しい世界が横つて居る。そうして其所には精神の存在との戦が其のアルマゲドンを持つて居る、して時局は暴虐し且つ延長した。故に敵は最も叛逆し且つ勝ち誇つた、一番心細いのは後の安心である。全く吾人の最も安全な情緒は吾人が期待しなかつた手から手綱を引捉

へて仕舞つて殆ど堪へ難き程不潔な物は神聖のヨツブに澎起して盛つた。若し道德と精神的成就が全體であるならば、失敗の屈従と失敗の失望は免かれぬのである。けれど此點に於て内面の新らしき國は精神に比して展開した成就とか新精神的直観を超越したのである——其精神は例い「事實」の中に適當な表示を見出さなくとも、——精神生活の最高の個人的人格で有るのだから最高の效力なのである。吾人は便宜的意識の動作や成就とか履行とかから人格とか品性とか憂とか處分とか計畫とかに變化した。斯な事實は神と共に親しい吾々生活の中に創作するときには天才を除く外は效力を存せない。でなくとも豈に堂々たる漲大な自己の主觀的法式なるのみで。個人は絶對生活に對して此の直接内面關係に於て吾人は「爲して居る事」から「成

來た事」と變化させんと熱望するのである。而して單に標準の認識は神來と消却の個人的遍在を以て其標準の價值並びに裁斷と一致せんとする。是を以て吾人は「一般的」から「性質を表はす」宗教にと變化したる。そうして世界に對しての甚い矛盾の内、其宗教は後ち精神生活の勝利的保全に對して立つたのである。なせかと云ふと僻け感謝或は變化に依る悲の超越ではないのだ、即ち總て偉人ポーロの徳則廢棄論の光榮は恥を通り悦びは哀を通り、人生は死を通つたからである。がオイケンはその最高な生命の系統的な證明は試みなかつたと云ふのは其人の徹底的現は吾人の勝利の根元で有るからである。其を「證明」するは其物よりも於上の法廷を得るに必要で有る、であるから其證明は實用的なのである。而して創造的勢力の弱らぬ流で有り且つ

精神的見識は神の市てふ精神の町を流るので有る。斯な個人的確實は解釋しなくとも公理的で有るばかりでなく現實で有る、吾々が上に戴く神の生活の再生せる働に對して吾人人生の英雄的並に全然の唱和なのだ。茲に於て其はオイケンの基督教の心隨に最も密接な近似で有る、恐らくは自己を忘れた偉大な稱賛の聲は憐れなメソジストの女の格言になつた此の大思想家にあびせられた。メソジストの女子平たい語で彼が觀念を説て置いたのを聞いて「ねーあんな事は遠くに知つてますわ、集會で習つたのですもの」と云つた。

第五章 活力主義としてのオイクエンの哲學

吾人はオイクエンの活力主義としての個人的哲學を想はんとする様になつて來た。名辭は先づ第一に「人生の基礎と人生の觀念」の中に現はれんとす、之を取る代りに廣名辭宗教觀念は神祕的狀態にて宗教的因縁を有する宇宙凡神陰論非擬相主義の獨乙に於ける復活に依て喚起された定限の方針を指示して居る。併し活力的位置は既に彼が著書し「精神生活の統一」の中に啓示されて居る、之の中には直接世界に對して自己觀察並びに自己直覺のみならず自己活力的主義として人格の自己意識を力強く云て居る。「行爲は眞精神的事實で有つて、活力統合の中には對向の主觀と客觀とが存し其間に救済主の神の實

現が超越して居る、而して行爲の除外的實例は恰も精神生活の神祕的要素の價值を否定せんとする。「人生の基礎と人生の觀念」の中にはオイクエンが二つの近代哲學的傾向と活力主義を比較して居る、その近代哲學的傾向は即ち斯うである、實際主義と塾考的美學なのである。此の活力主義は實際主義と類似したもので其の實際主義は亦た理論的考究のみならず行爲の中に存して眞理に對しての解とも見得られ、また其の活力主義は實際主義に對立し、而して之は吾人の經驗に反して實在の隨伴的性質に其の活力主義を固執するので有る。吾人は其の活力主義を吾々人間の必要とか状態に曲げることとは出来ない。何となれば實際主義は其必要とか状態の標準とかは價值の方に吾々を曲げからである。彼は美的個別的存在論と戦つた、それは

吾人は恰も唯だ直解的の言葉に譯され或は快樂に變形せらるばかりに必要なる爲め世界の中には生れて來なかつた、併し第一に其個別的存在を求めなければならぬ、何となれば吾々は生命中心の極度な變動を通るからである。即ち明白な最も公平なオイケンの活力主義の定則の大略は「人生の基礎と人生の觀念の中に現はれて居る、そして又間接には簡単な問題の要素の中に窺ふ事が出来る、故に余は再びギフソン博士の書中より滴出せん」とす。

精神と人格は内面に應へ統一を叫ぶ作用の中に實現された實在に依て解決せらるゝ問題で有る。吾々人間の力の經驗にて此の力で最も協力となる分解とか或は死を作る、亦た其の力は凝聚とか生活を作るのである。併し與料の水平面は斯な反對力の相互調和を得んと

するのである。何となれば此の立脚地には其の力に依て支配さるべき調和が與料を超越して横だわつて居る、アルキメデスも其外面の支點を除ては世界を動かす事は出来なかつた。故に唯だ吾々の進路は自助に外ならぬ。吾々の要求は人間活力の眞の創造物で、科學とか藝術とか社會に依て自分の上に形造られたのである。而して勝利は與料を超へて吾々精神生活の未だ未開な中央に嚮て吾々が路を前面に、内面に靜かに進んで行く。此の路の一步一步は精神作用の或る形態を通らなければならぬ、其精神作用は——動だ美とか誠とか正とかの觀念名辭に於て之の動で其を感悟して眞生活を實現させ且つは生まん事を助くるのである、故に吾人は新らしい直接を打建てんとするのである。此の新直接は平靜な而して自恃の自然に獨り吾等のみを安

全ならしむ。げに、眞の過程は此新直接を經、しかして吾々人格はその眞生活の統一に嚮て生長らへんとし而して之をば唯だ吾々に依て現實さる、「絶對生活」の現在崇拜に引入らしむるのである。之に對する不變的吾々の生活は眞の壓力を經て吾人に熱望を大ならしめ、亦た、其に對する作用は吾々精神の幸福を斷然と行はしむるのである。直接精神は斯な直接意識とか直接傾向に移さんとて來る、而して斯の如きものを附隨的現象的水平面に引退げんとせしめた。——是は自己の眞理でないから充分な眞理とは云はれぬ——直ちに自分に取りて眞理となり且私自身の活力を通過て眞の勝利となる、のみならず眞理は抵抗物に對して勝利を得る丈けの力を除いても眞に壓する力を有する。而して或る反對調和は致死的感覺と熱望的默會をある物として吾々

に近づいて來る。生活過程の問題に關して、云ふに之は彼自身に對する吾々の活動で之は眞理か虚理か有る。人々が吾々を精神世界の直接に引擧げたが此精神世界は未だ吾々の精神的統一を確實ならしめんとし且つ機構せんと致々と工作して居た。であるから吾々は眞理としての特性をつくる事が出来るだらう。眞理はそれを自分の高い命數に現實させんとする吾々生活の自然的な努力なのである。實際的眞理問題は如何にして實在を見出さんとするか、活力的現實の眞理の試験の力は生命と一致せんとし且之が内面にいかにも大様に擧つた反對を壓せんとす。時に古い對立した眞理と自由の間には吾々に對する騒ぎが止まんと自然の眞理は考へられた。何となれば實際の眞理は精神生活の自由を經て唯だ勝を止むるのみで有つた。

真理は其の吾々が反対方向の總て其内在的誘惑を賤しみ無制限に提出しなければならぬ自由の生活に對する或る成就した實在の長い間耐ふる啓示では無い、真理は成就げられなかつた如うな吾々の自由で有り或は精神的命數で有る、故に一層遙かな成就を吾々が自由の中に實現させん。

オイケンの活力主義は宗教範疇の哲學的要求の如く基督教の牧師に依て奪はれた彼の哲學の總ゆる局面より優て居る。然して亦た此の活力主義は神學者に對して幾多の集合點を與ふるのである。而して信仰に依る正義とせられた事としての斯な教義即ち人の最も大なる道徳的行爲は神の最高な可能性に對しての一の應答で有るとされた、故にクリストが十字架の上にての行の様な神の最も高い焦點なる可

き行に對して席を譲つた。併しオイケン自身は斯な獨斷的包意に對しては感謝しなかつた。彼の働は全體としてとつたのだ。之が中には幾多の原素を含て居る其原素は彼を技へる所の要素と見られる、斯んな含意的ものに對して深く戦ふのだった。オイケンの獨斷的基督教に對する關係は次の章に論ずることにしやう。茲では彼が活力主義と基督教教義の優美とか消還との間に確かな親和力の因縁が有る名辭に就て充分説明しやう。何となれば活力主義は代へられた正統主義の復置の助力を證明せんとするのみならず疑無く真理で有る、だから神學に依て生殘つた自由主義は忽にして近代的となり確實となつて來るのである。

活力主義は吾々に一つの世界を與へる、其の世界は吾々に描寫と

か解とかを要求するのみならず英雄的精神活力に現實とか成就とかをも要求する、而して之は精神とか精力とか道德的神韻とか自己實現に對する中心力を作る。されば、之は神とか貧血の様な微少なものでなくして審美とか空想とか思辨的理知とか或は人格よりも神祕な神の知教等を含むのである、故に神は神の靈感とか恵に對して精神的存在を想はしむ、之は神を含む人で其神は精神的精力と倫理的活力の名辭の中に定められて居る。而して或者が云つた様に吾が主の神耶蘇基督に對して席を譲るのである、活力主義は一つの精神世界を假定した、其世界は唯自分等のみを含み且つ自分等のみを吸収する世界で、自分等の上に運動し形を更ふるのである。之は充分な道德的個人的に究意的實在に對して個人的關係の斷然的行爲を作る。神

學は此の一點に於て歩み入り且つ問ふ、「人の最高な行爲は何で有るか」「人間と神との關係は何が中心で有るか」「人の戴く神の行爲は何で有るか、その中心となつたもの焦點となつたものは何程有るか、活力主義は明白な基督教の解決の或る要素に對して席を譲つて他の確定を概活的に示して局部的な答へを與へたのである。

第五章 オイケンの歴史哲學と過去の生活

誠實な道徳的人格の其一の必要な事は過去との關係を決する一事で有る。過去は未來の背反的緊急と共に自己の觀念を覺醒させる、過去は現在を作つた材料である。「街人」其人は歴史の學生として亦た起つた、歴史は其人の精神で有り或は其人が住む世界である、屢々暴黨だつた過去は虐待で無かつたならば神來の靈感であつた。個人的失敗の追憶は創痕又は刺傷を遺すばかりでなく死だ様に麻痺させる、されば臆病者には勇氣を起させるのに毒なのである。過去の種族とか人民とか寺は近代では屢々重荷の様に亦た夢魔の様に感じられる、現代の活動とか進歩とかの大本源よりも甚だしい。傳承は之

を若い觀念の死だ手の上に導き傳承動産の紋切形の便宜は創造の結果を麻痺させる。斯な數は困襲の權力に服した所に平和を認むることが有る而して確に減じつゝ有る垣の中に彼等自身の救済を果した。他面では、自然の儘の物が過去の暴虐に叛亂の旗を擧げる、思想は蠶の様に生殘て自己の實體から現在の織物を進化させんとするその過去は十度善い頃に之が脈を切て仕舞うとする。虚飾も無ければ肉の妄想も無い、獨立的の人生は神經の反射作用より大きなもの苛酷な仲間の中に電氣鍍金されて仕舞ふ、而して姿勢は最初は奇怪となりさうして妖怪となる。過去の暗い地下室から遁れて來たが神經を失つた死手は其路には横だはつて居なかつた、假令死の作用が吾々の上に有らうとも其は全く顧みない、更に吾人は正義を放棄は

しない。

此の過去は過去の粘性其物を發見せんとし實現せんが爲め吾々若い世紀に與へられたのだ。其の過去の粘性は嘗て命數としての嚇とか堪へ切れない事の如く認められた。之は世紀の初に於ては實際で有つた、之をメーテルリンクが論文として書いた其は新らしい觀察としての古典的な言辭で永久に傳はるだらう「過去の力」は實に人間が考ふる最も堪へ難い一事で有る……吾人が容易に與ふる事の出来る方嚮に熱心に従はんとする、だが潔し易い物は一つも無い併し此の可型性に乘せんとする最上手段を知つて居る……其は實在の中に生るゝで有る、されば實際に吾々の此の多くの人に於上深い意味で現在が未來が之より更に燃ゆる生活を與へた。實在の中の此の死んだ町は

吾々存在の暖い寢床だつた、そうして人々は死だ町の吾が寢床に歸て來る精神は皆なが其所に健康で外に彼等が持つたものは無くして居るのを認める。

……此の世界に於ての勝利者……斯んな事は自然に知つた之は未だ現存して居るありの儘で長く存在しないのは多少明白である、過去は唯だ其物が完全になつた結果で有る事は幾分か明になつた。彼等は年月が自分等が骨折て居た所から除いて呉れた事を知つて居るだが未だ新らしい主人公の下に昔の如く服して居る彼等は自分等の永遠に動いて居ると云ふ事を知て居る……とは云へ其は彼等の後に廣く遠くまでも蔭を擴げんとする。彼等は唯だ蔭に直ぐ影る悦びの身振や希望の身振を影さんとしたそうして此の難破船から豫期しな

つた寶を撰り取らうと……其を急に突のけた……彼等は過去を知つて居る亦た總て過去の事實を回顧する力も持つて居る、そうして過去、死は彼等自身を無効にするのだ、亦た彼等の判断は更に過去を裁斷する爲に之が過去は明日は新しい生活に依て形を變へられた能力を與へられた。

茲に拔萃したのは哲學的時代で總て歴史的關連から脱し考へられたのだ。二十世紀は歴史的意識の空前の進歩に依て組織された。今觀察の歴史的立脚地よりあらゆる物を見るに「成つて來た」處の連續的連鎖としての理解的歴史は進歩の成功的形象の連續した流で有る。萬物は歴史的絲を嚇かしたさうして靈的の生活でさへ單な「歴史」的範疇となる爲に傾て來た。一面に於ては古い概念から吾々を自由

にさした斯な見解は歴史に於ける一定點にて自然的不滅の真理の動を密接せしめた、故に他面にてはその不滅の真理は一日生命論の中に戻る、何となれば成つて來る真理の永續的流は走る所の觸覺に對しては稀薄になる爲め、實在は蔭の邦土を作るので有る。而して若し更に歴史が論理的の如く又有機的進化の如く考へられたならば之が歴史はその進化の合理の中に了解されるのに必要なもので、其の進化は僻けられぬ破られぬ成功である、故に吾人はその過去に對するを眞の奴隸的な所へ引入れた、其の過去は吾々の前進者なので脱がれんとする氣高い空ならしめんとした。吾人は受身の受納者となつて來た、「背馳時代の裳裾持」は即ち吾人が勞働とか吾々に取つては外面的で、歩行者の藝術とする一生の復活を超越することは出來な

かつた。

此の衰へ弱つた過去に對する態度は其の貧弱な過去に依られた歴史の見地に對してのオイケンに反對で有る而して個別的な存在で有るか種族的な存在で有るか其は性質を現示せる自由人格で有る自己實現の課程の成就に對して劇台と成つて來る、併し此は歴史の中に明かに二要素を含ましむるのである、茲には唯だ人々の浮沈といふ「出來事」の糸も亂れ無い流れが有る。成功の光は下つて過つた、生活は死に落ちた。茲では亦た大偉人、路を開いた人とか新紀元を開いた人に焦點となつた。幾分か斯な者は其の流れから超越させる或物は背後に、歴史の中に不滅の真理の王國を假定して創造し且つは戦ひ之に意義と價値を與へた。斯くの如く吾人は精神的歴史——不滅の安寧を實現

する爲めの時代の戦を得んとする。此の立脚地から觀察すると、時代は靜安な所の他から完く續いた連續とか有機的の生長と云ふ一つの物を復活させ得ない。精神的な生活は是をば伴て衰微に沈めて仕舞ふでなかつたならば之は其の連續とか生長其物に對して各々成功した時代に依て再び改められそうして創造される。だが併し各時代は過去に偉大な物で有つた善なるもので有つた斯んな總ての物で最後に合體を求め連鎖の輪の如く其の場所と續がる、そうして勝利は過去に反對と對照の中に自身の精神生活を定め先づ過去に對して亦た其の獨立なる事を證明するので有る。

歴史に對する此の態度は最も明確に且つ輝いて「人生の問題」の中に示されて居る。此一巻はオイケンの著書の中で一番大切な本の一つ

で、恐らくは讀者一般に共通的な本である、此の世界の大思想家が説くところに依ると絶えず遷り行く世界の精神哲學の歴史の原理を教ふるようである。オイケンの歴史的方法の試験は此本の範圍外である、併し彼が歴史概念の二三の啓示は吾々に最も重大なる過去の觀念に對する態度に助けとなり且つ力となる。

最初の状態は獨立である。自由の精神は眞實な友人間に存して、獨立の犠牲は主に對する敬意の如くに子弟に對す敬意の如うである。斯な獨立は矛盾しては居ない寧ろ一層深く基礎を固め、敬意を強くするに最も必要なのだ。時に吾人は斯んな大思想に接する如に成て來た、而して唯だ敬を受くるばかりで無く、精神に徴を生じた世の人々が源泉の如き精力に接せんとするのだ。吾々の敬つた驚きは彼

が発見した問題に移つた、彼が斷案は新しい疑問にと移つた、故に吾々の精神的獨立は近代の問題に接觸せんとする創造的精神力に適應せられんとする。吾人は大思想家の子弟であるばかりでなく共働者である。而して彼に對する關係は唯だ主觀的驚嘆或は狂熱的熱情ばかりで無く寧ろ。

斯な歴史哲學の觀察は基督教徒の思想に對して最も活力的利益である。嘗て其効力は握られた事が有る、總て斯な試みは基督教の機械的「復興」に試みられた。之は恰度敬虔主義の未だ未熟な概念の如く往時に歸つた頃、或はトルストイが小供らしいとか不可能だとか云つて痛く感じさせた福音に對しての歸還で有つた頃で過去を再び復らせんとするのは禮拜から偶像崇拜に墮ちて行くものゝようだ。そ

うして自分の精神的生得權を無くするのである。故に吾々がオイケ
ンに斯な觀察を持てと要求しなくとも吾々は此の範疇を抱くことは
ならぬだらうか——之は基督の福音に歸るのだ。福音の背後に立つた
基督に最も近代に還て來るのである。それには近時評論の立場に居
る幾多の學者等が精神的見解から献身的に研究し初めた。例も斯な
歸還は教會の集合經驗又は集合意識の基督に造られるのであると反
對に思はれた、而して斯かる經驗の價值とか充用に對する基礎とし
ては無い、勿論其の後の場合は正當で有るのみならず本然で有る。

亦た、此の歴史の概念は之を實現せんとて吾々を助けて居る歴史
的獨斷な基督教に對する吾々の態度に最も必要なものである、吾々
は叛意を翻すより猶ほ擅有的な且つ積極的な物即ち因襲的獨斷に對

して幼兒の如うな心情で無かつたならば充分に正義を主張した。若
し之が理知的體姿である如うに吾人は彼が歴史的地位、即ち吾々に
授かつた二十世紀歴史主義は同情的了解を以て古い時代に之を信じ
た結晶體に接しなければならぬばかりでなく、彼等が吾々に對する
地位を嫌遜的に了解して、精神的生活を彼等に分けてやらねばなら
ぬ、之は吾人の生存に依て同時代物の表面の下に認め得る不滅な効
力の原素である。ときに吾々が生活の源泉、或は意識を作らんと吾
々の獨斷的過去は望むが併し惡魔又は死と云ふ相傳動産を残して行
くばかりである。

併し此の不滅な精神的贈物としての過去の觀察は吾々が個人的精
神に用ふる時は一層深重な意味を持て居る。此の罪惡に就ての失錯

に關して此の觀察は人々の痛き心に言ひ盡されぬ程の苦しい過去を作る。精神も亦た一個の歴史を持って居る、故に之は實際人間の不滅の價値で有り且つ其の價値は彼が二個の歴史を有し、其をば永續に使ふからだ。彼が歴史と過去が有る間は彼に對しての命數である——即ち鋭い難き事件の連續、兇猛な必然、彼は其内に魅せられて居る、——彼は死の圓天井の中に住で居る、だから更に人格の人となれどもしなかつた。併し一度は必然から自由でふ過去の出來事に變體せんとした道德的人格の反動力に依て事實に生きんとした、善なる出來事に對しての支配は嘗て其を支配した事は無かつた、遷り化する過去には彼が内心に生じた眞の道德的反動に依る禍であつた。其が嚴かに正義なることを證する道德的自己裁斷に依つて意識の幽靈は

現はれる、彼は唯だ新らしい世界のみを掴む事の出來なかつた勝利の精神的生活に入つた、併し此の力に依て舊を再構することができやう。そうして茲には一層遙に其の恵とか寛恕とか救済とか信仰に依て吾々の精神と同じく吾々の心の理解力に持て來る證明とかが有る。何となれば吾々の現在の觀察が徹底し且つ過去に徹を生せしむるならば、又若し吾々を惡からの自己裁斷とか堪忍難き激變が闊膽とした罪惡とか變化とか過去を救ふならば救を見徹す神の神聖は何で有るか、神の御心は吾々と密接して居る、之は殺さんが爲めに人間の心を激せしむるので有るか、生かさんが爲めに激させるので有るか、若し吾々が其の背理主義の中に殘らなかつたならば、哲學の正義は之を救はんと歴史的事實も對應し引取らんとする、而して神

の濟度の動きより以外の理知の中に遺す。吾々は惠、寛恕の哲學的實在に依て其救濟を試みなければならぬ而して吾々は茲に立脚地を發見しなければならぬ。

第六章 社會化せる人格と超人の崇拜

吾人はまだ充分に進歩した人格ではない、なせかと云ふと吾人は社會と神との關係に依て僅かに形を作られた、構造の中に住て居る人間で有るからである、吾々はあらゆる敵と戰を交へながら人格に嚮て進て行く此の敵は個人主義の美的な形の伏兵よりもまだ少ないから善い、然しそれは理想主義の言語を話して自然的確信の内に陣取つた、更に之は工業的機械崇拜に反して盛に異議を唱へて居る内に理想人格の疑問と眞實な因縁を結んで居た。そうして物質的教育の獸的な性質は且又自由に對して自己表示に對してまでも粗ならしめた。個人主義の此形はニイチエの名と共に密接する如うに集め

た、ニイチエは總て野獸的な自己斷言とか或は嫌やに尊大なのに對して責任を負ふべきものを造つた此の事は彼れの或る弟子が書いて不徳義な一般に主人の名で以て應用させた。

オイケンにはニイチエの感情的な女性的なアリストトールの精神に對しては公平に滿て居た、故に充實した幾多の價值有る道德的宗教的の諷指は彼が頁を飾る飾釘とも認められる。併し彼は例も情緒的主觀主義の現示の如く最も鋭くニイチエとは反對で有つた、之の情緒的主觀主義は其鋭い反對の特殊な自己満足てふ内面の上達の結果に成就げた中に落ちた。何となればオイケンの人格は社會的感化に依て創造され組織されたからである。唯だ感化其物が人格を止むるかの如く其の結果として現はれた。基督に對するニイチエ學派の曲

解は頽廢衰微した佛教よりも多くは無い、亦た生に對して默從的で有り消極的の有る基督教の現在の形には反對で有り且つ碎けやすい人間の治療に「治術」の代理者で有るばかりでなく生に對する動的勇氣の源泉で有る基督教——所謂喜樂的で有り亦た能動的で有る基督教に對して反對である。生の未だ教はりもしない貧慾とか超人の巨大の利己主義とか自己現實の爲めに神を呼ばんとする者に對しては反對で、勿論辨證的現在、論理的で無く個人の自由を得んとする者に對しては反對である。

宗教改革以後の基督新教の打撃を受けた宗教的個人主義に嚴として耐へ得た、事を滴示するのは最も必要である。吾々が公衆的倫理は未だ自然の儘で未熟であり且非基督教だ、なせかと云ふと吾々基

督教國民の社會的本心が努力も敗北したがまだ背後に潜で居る世界
 で有るばかりか牧師の管理する職業の教會は私敬神とか素人學者の
 精神學とか空想的博愛主義で覆へられたからである。一般の人は「十
 字形の基督教」と最も廣い公衆的な倫理の深い意義の間は深い因縁を
 有するのだと云つた、併し之は王權を除ては基督教では無い、否吾
 々の中に基督を除ては王權は無い。其人格を取圍んだ社會的運動に
 讓つたかの如く見へる。

美的利己主義は斯な社會的義務とか同情とかが人格の形を造り行
 くのを蔑視し嘲けるばかりで無い横着者だ。例ひ腦が兩刀の刀の如
 くに銳利になつても發狂した精神の孤獨に落入りて此の免かれぬ天
 罰から遁れやうと美的個人主義の行者は次第に奥義的な崇拜の形に

傾むいて來る。茲に亦た天才が平凡に叛つて旗を擧げる丈けに此の
 運動は眞の人生哲學と因縁が深くなつて來る。英雄的趣味で個人主
 義の中にて平凡と戦ひ、更らに、彼等の戦は想像した平凡な事とが
 俗物の世界で初むる。で平凡な牧者等から引離さんとする被選者は
 彼等が大望の最も高いもので、解決は仲間のヒステリ的な「自由の」
 神經痛である、斯な人の飽きたらしめぬ國産とか秘密とかに對する
 食慾は總ゆる趣味、政治とか社會とか亦たは宗教とかに對して過純
 なのと同單位である、振子の端は絶へず振返へす。滿々とした肉感
 の培養は彼等に自己の獨尊權を主張する。

こは唯だ不條理的要求の強大な聲價並びに情緒的主觀論の私生的
 觀察では無いと云つても此の傾嚮に對するオイケンの評論は近代に

於て特殊の價値を有して居る。時に崇拜は英國の社會に侵入して來た。是は即ち宗教の概念に依る正當な要求で有る、この宗教概念に「生活に對する地下の結黨」として現はれんとする、宗教に叛亂「快樂精神」の當然なる可き希望の教會が存在するよう有つて信徒とか野戰病院のような宗教の架空的概念或は優美とか心を清くする内的な教から生命に滿々た恵にかわる。比較して見ると凱旋的悦びの壓力は「ゴルキー」の「仲間」と云ふ様な斯な本の中に通つて居る。此の本の中には壓迫、監禁、苦痛、死等と云ふ蔭に人々が住て居た記録を窺ふ事が出来る、更に熱誠に漲つた、蟲と同類、意義の光、深重な且つ身の毛の竦立つ程の悦びは吾々が教會の多くの生命より新約聖書の天才に亦た同性で、現在の教會は靈魂とかこの問題に對する幾多他の精

神に悦で居る所を辛くも知り得るのである。かくて吾々は基督の世界の次第に大きく成つて來る悦びを取戻すまでは其の疵は金色の光榮を浸されて居た、そうして悦びの花は碎けた蘆の眞の割目から突然と生するのである。吾々は決して斯な悦びの精神を誘惑しやうとは欲せなかつた、なせかと云へば之は世界の心隨に屬するからである。吾々はオイケンが生の哲學の基礎的要素を通俗的に觀察して居た。而して最も純然たる有機的自然のあらゆる趣味ある光榮を顧みず等閑に付したオイケンの智識論は是れ迄吾々に不徹底な形として傳へられて來た、故に彼の著書を徹底的に定評するのは最も必要な事である。併し明に背理主義の方に傾て來た、之は最後の形として吾々に與へられたのだから茲には説明しない事とする。彼が神秘説

の不完全な評價は次章に説く事としやう。併し此の完全な對論は彼が眞の評準となる可き精細に渡つた塾考と心理學に對する消極的態度を要する。亦た茲には進歩の明確な直線が横て居る、そうしてオイクンの哲學に強音の變化が有る、彼が最近の著書に於ける人文學者的光景の絶對勢力は彼が茲に入れる事を許さなかつた。否、茲には彼が示さんとして如何に理知主義に反對しても易く握る事を得た概念の力を賤しい評論へと導き、そうして統一せんとしての精神と意志の作用を有するその精神生活の概念に一つの裂傷を生せしむるばかりである、とは云ても之はオイクンが矛盾した信仰とか或は「感覺」に依つて得た彼の哲學を云つた意味で無い事は特筆大書して置かねばならぬ——彼は思辨的基礎を主張せんとする——併し之を彼が

哲學的勇氣は彼より一層總明な理知的認識をなす精神生活の源に對して意の儘に冒險的に其眞理へ擴げ得なかつたばかりである。茲に一つの確かな疑がある、こは精神上の概念力又は眞の「自由哲學」であつて其は彼が力で有り且つ榮冠で有つて、之が上に流るゝ精神生活の神祕的基礎を洞察する精神眞理の力である、自由思想問題の倫理的宗教的解決した役が自由に對する辨護は茲にギブソン博士の書より之をば引證すると其の評論に最も極端で有り且つ其の再構に最も堅固で最も満足させた」とある、故に個人的自由の記事の如く觀察すると彼が固執する否定で心理的の自覺に對して自身で裝はんとして上に記載した二つの消極的傾嚮に依て僅に之を破つた。併し斯かる蔑視的非難は最も偉大な可能的試験で以て未來を耕作して行けと云

ふ、なせかと云ふとオイクエン哲學の終局の評價は吾人が彼の完全した智識論を認むるまでは出来ないからである。

オイクエンが英國人の思想に浸入して來たのは之が古い研究時代で有つて自然的な常識の如き哲學で有り且又宗教的確信が近代的自明前提論の半ば同化した騒々しさに依て惡感情を起した頃で有つた。之が不同格な物の知覺と印象に同情して之は小供の箱庭見た様なものを持って來て呉れた而してちやんと其中には實も撒て有つた、然し嘗て芽も生きそうにはなかつた。斯んな氣分に對してオイクエンの哲學は此の如才の無い實現を好んだ一般の要求に應じた哲理的、現實的な性質を有つて居る。而して堅固な思辨的基礎の深い地固めを持つて居る。で彼に對して生の哲學は哲學の意味を成さなかつた、其理

由は人生に隨て説明かさうが併し哲學は人生の一部分で有り且つ消還の一方法で有る。故に斯くの如き自由の問題と人格の問題は彼等各自の机に出ずる論争に依て解決せらるゝ論理上の謎である、生命の發出は十字軍に依て戦はれ勵されたのではあるまいか。理知は壁で取圍んだ之の家の中の廣間に座つて居る精神は生活大學の哲學者で有る、斯くて自然の指命に自治權を有する事を主張し反對するばかりで無く、其の指命を蔑視し憤然として怒り憤怒てふ壇に飛び登る。彼が哲學は内部に獨立てふ私語を收めた精神の歴史で有つて神性は主權を蔑視して最高の試をなさんとし且つ其力は之をば殘忍に化せんとする。彼のオイクエンに對して生活は討論會では無い、なせかと云ふと戰場だからだ、亦た茲に競争の力は人間の精神に對

して戦闘に努力して居る、彼が趣味は唯だ罵のしる言葉の「福音」に依りて起され人間精神の助けに依りて存して居る。彼は嘗て出来事が抵い精神の新しい生活に入る事は私が生れて此方幾千の新世界が発見されるが私には其よりも尙ほ重大な事ですと現代の文學者に言つた事が有る、其の語調は慎重で熱心な確信が見へて居た。然るに其は理論的有機體から光榮的自由を得た様な、糞肥の編狭的な不可能性から光榮的自由を得た如き「學者」(吾々が物知學者から受ける)彼の性質の現はれた題目で有る)彼が生(の哲學は偽的神秘とか快樂主義とか粗い粒とか町の隅の哲學者の純い觀念主義とか粒の荒いやつとか町の端に立て居る占者の哲學者の如き純い觀念論とか斯んな者のヒステリー的な流の再運動を受けたいけである。で潔白な感情とか若

々しい精神とか勇ましい自然の試験は彼に此問題を持て来るばかりで無く、亦た厳格な教を受けた理知、深遠な教を受けた哲學的精神、廣い觀察眼を有する評論の力、徹底的見識等を彼の働は吾々に與へた自然的の氣高い哲學的理知主義の側に地位を定めしめ、而して貴族的の思想家に對し混亂した公衆精神に對して是非共に開拓者として列せしむるのである。若し他面に於て其の精神に新しいものは何をも見出すことの出来ない抵い人民の生の偉大な一般的事實に對して密接して居るとすれば、獨り耶穌の教の再叙述の中に基督が教へた靈感の斷へざる源泉とか彼等自身の働に對しては創造的精神の此基督が哲學的に再び記録した中に窺ふ事が出来るし、また特に健全な力を持て来る現代基督教の形の基督教徒の精神に對しては鮮明

にして重味の有る評論をするばかりか舊に對して黜けと云ふ丈けで無く寧ろ毎年既に失つた空な聲價を持つて居る福音と同一な教會を聯想させる。

第三章 ルドルフ オイクエンの歴史的基督教

オイクエンが今日吾人の前に近代の大思想家として立つのは嘗て理想哲學が解決し得なかつた、道德的實在に對して吾々の要求を満足せしむる新理想主義の主人公とでも云ふ可きものだからなのだ。そうして彼は教師として倫理的理想主義の宗教的包意に最も充實した顯然として進歩した智識を持て居るからである。されば彼が生活の哲學は精神的の最上權に類すべきものであつて彼が自由の辨護は精神的自由の教理の如く神の救の教に依て吾々が從屬する神に突入つた。故に彼が人格の擁護は自由の救済で有つて自己を中心とした人格の奴隸的心狀から神を中心とした人格に引入れる救済方法であ

る。彼が活力主義は吾々の行爲を通つて進歩的實在ならしめんとする組織に於ける神の邦に立つばかりで無く斯くの如き不可能なる實在行爲を無くした充分な改新の與料に對して有る。彼が著書を度を重ねて讀んで行くとその頁の中には特殊な基督教の範疇と眞實に基督教の牧師の流行的な嫌厭を咎めんとするに熱誠な先入を認むることが出来る。そんな辨疏的臆病な教師共は進化といふアクセプトで惠てふ語を話す如くに吾々を誘惑しやうとする。而して精神の最高の試験なさんとして唯だ神學てふ看板は彼等が憂慮と云ふ物の中で半教を收めんとする。また吾々はオイケンが基督教の要素に對する熱心な評價に依て夢中にされた、之は彼が消還の原理に對する全然の寄生と精神的生活に雙び無き耶蘇に對する敬意と高い尊敬を拂つ

て居るからである。故に彼が一種の宗教哲學を秘藏した——問題の全體「宗教の眞理」吾人はまだ基督教徒たり得るか」と云ふ此の三卷は彼が基督教の中心精神と深い因縁を實現せんとするもので有る。斯くの如く世の中に撒布したオイケンの著書は基督の豊富な啓示した閃光とも云ふべきもので、此の基督の精神は彼が哲學の體形に勢力を付けまた力を與へたのである。故に此の外の理由に依る所は無いだらう。然し理知的方法の人工的範圍は宗教を拒絶し、而して生の哲學は例も或る意識の中に信仰の哲學を有するのである。オイケンに於てかゝる宗教的包意の哲學は最初から承認されて居た。彼が著書の二枚の表題には「具體精神的經驗に對する戦ひ」とか「宗教の眞理」が含意の一つの説明として窺はれる。遂に斯かる宗教は佛教の意義が明白

になつた如くに基督教徒も消還の宗教でなければならぬ。何となれば、吾人が見た如くに茲に於て最後に壓せられて居る生の反應作用の天才の闘とか消極的運動等が有つたならば理知上の最も徹底した解ばかりでなく發動的に救済の經驗を經し消却とか改新とかいふ精神的活動は神から直接の救済で有る。

オイケンは何を経て次第に思辨的天賦の才と同感的態度、精神的情性の價値に依て教師として一般に認められて來た、さうして彼は近代思想に對して稱賛的基督教の指導した場所に舞臺を開かんと定めたのである。——彼は近代教化の混亂した問題とか宗教とか人生の中心となる可き疑問と共に集合體の智識を持て居た。彼が響て居る神學の智識は特に獨斷の進歩とでも云ふ可きもので而して彼が之に

對する態度は全然尊敬的で有つた。彼が物質の一般的近代意識は奴隸状態から時代の理知的流行に遷つた完全な自由と逢着する彼の綿密なる歴史的學識は自己の思想に臆病な警戒の障害物を置かづば彼が見解に廣い確心と大度心を與へたのである、かくて幼稚な思想家の住て居る全時代は彼を未來の宗教に對する開拓者として觀るとは驚くではないか。

是に加ふるに、積極的基督教徒の精神が彼を觀ると古い主理論の恩人で有つた基督が恩人然とした態度は特に相共に有しなかつた、されば基督教の評價を觀る事が出来る。而して此の評價は近い場所では止ら無い、なせかと云ふと其所には精神的生活の廣い河水と神に向つての希望てふ大なる流れとが有るからである。此上に基督教

は拒否てふ頭を擧げて居るからで。オンケンは斯んな基督教の星學で云ふ視座と最も今日を技ふる程必要な親縁を持つて居る。之は十字架に磔けられた基督を中心とする正派神學に對する基督教なので。近代の二三の哲學者が及ぼす如くに、彼は償賄のあらゆる説の背後に横はつた神の愛、神の正義と云ふ問題の實在が莊重であることを認めめた。罪——こは失つた小供に盲目の如にもがき悲痛に藻掻きばかりでなく道德の指命に叛つた悪い奴だ。——道德の指命は、彼には實在ではない之は十字架の磔刑に會つた救濟主の概念作用を嘲けり且つ道化人が爲め彼を一人分丈け許して貰へないだらうかと彼の知覺神經を一層深く刺戟した。何にしても彼は否定し否認するのであつた。彼等は其の傲慢な玩具であつて物の天才に反對の平たい道理上

の心の人であるばかりか彼等は宗教經驗の實際深遠な所から進んだ之の宗教經驗は之の生の清い源泉を開いて他の精神に分つことを非常に妬んだので有る。

此の本は彼が宗教の哲學を含んだ、之の中には最も完全した形の卓越した其譯書に「宗教の眞理」が有る。多少之が中には無雙な形が含まれて居るが其の筆敢は力と創意が朦朧となる如くに傾て居る、で極めて具體的な所と澄渡つた形の如く問題の困難と深遠なのを屢々蔽ひ匿さんとして居る、だから宿命の結果はまだ解決することは出来ないと云はねばならぬ。

之はファイテの様にオイケンも眞に豫言者として忘れることは出来ない、そうして豫言者の天才に屬して居ることも繰返して置か

う、亦た觀察の一點に依て彼が範圍或は彼が價值として注意して置かう。講師は最も可能の效力に對する目で以て彼の言葉は撰擇に對して手入りに對して與られるのである、即ち豫言は靈感とか情緒の握で、動を休まづ斷へづ言葉の惡計をする人々の仲間と一緒に動いた。更にオイケンの最も藝術的、思辨的な働は運ばれたが靈感と情緒に依て壓せられた、そうして特殊な抽象作用とチウトン族形の複雑なもの、斯な壓迫の下に鮮明な生命の光るもの造りは得ない。

「宗教の眞理」の中に吾人は針とか思辨的針金の上に送られた問題を持って居る、之は最近の著書、吾人は未だ基督教たり得るか」と云ふ本より寧ろ強い意味が含まれて居る。オイケンの歴史的、獨斷的基督教に對する態度は其の問題の聚集した特性的現示の如くに之を認るこ

とが出来来る。勿論之は其の意味を含んでは居ない。然し大きな働はオイケンの神學的觀察の正しい解釋に對して本質的では無かつた。反對に云へば其は斯んな解釋に對して基礎的で、亦た實際之と列んだ一般的な本より遙に少しばかりの内容を含んで居るからであつた、故に一つ靴底の理を引くと撰ぶ場合に當つて後のは非常に堅固で且つ要求的な形である。其の中にはその一つの輪點を與へる。

始めに戻つて多少簡單に力ある結果に關する要點を繰返さう「宗教の眞理」——吾人は此の著書がオイケンの生の哲學に對する總ゆる基礎的な著書で有ることが分る、彼は他の著名な思想家と共に生に信ずるところあつて之を根底として宗教を解釋せんとするのである。されば人間を割引して「此所と現在」と云ふ世界は彼を勵まして具體精神

的試験に對する戦の中に突進せしめた——即ち、自然の領土を超へて彼岸に横はる其他に對しての疑問、これは望み難き疑問で、若し其の「其他」が此の清い人間の範圍の中に有つたならば、宗教の中に、誰でも、人は内面に崇高とか改新を作り與ふる其人自身を超へた超越の世界に其が附着して居るのを認むることが出来る。吾人は見た如くに、オイケンは宗教に二種の形體——即ち普遍的と特性的に卓越して居るのである。上の前提を立脚地として之に依て觀察し簡単に説かんとすれば普遍的宗教は精神的としての宗教で有つて、新様式で有る、併し新らしい世界では無い、「吾人は世界の「内容」の新舞臺、精神的生活を持つて居る、併し一つの「新世界」ではない故に吾人は今日迄は超越の世界に住まなかつた、或は差角から其を置かんとするのであつ

て普遍的宗教は個人的ではない、其は唯だ普遍した、徹底した精神的生活を有つて居るだけで。此の精神的生活は昔自然と戦つた時唯だ一人働き勝れた勝利者であつたがその普遍的宗教には衛城が無かつた。なせかと云ふと普遍的宗教の上に坐て居る缺點と云ふ勝利の一點に普遍的宗教は遂に勝利を得ない此の世界にと戦つたからであつた。特性的宗教は一般に普及した戦士てふ精神的生活から芽へ出で、其生活は最高の實在なりと云ふ個人的全智全能の神に向つて戦端を開かんが爲めで有つた。そうして其神は宗教とか救済とかと云ふ結果を以て人間の精神を徹底させんとし此の内面的王國の中に變體させた。故に吾人は神性の無色の概念作用から生存、個人的神の最高な實在で有ると云ふのに嚮つて進んで行つた、この神を支配した

品性は自省の愛し有る、救ひの愛で有ると云て居る。また例ひ神に對する人間精神の關係が内面的直接として認められて居ても之は其の最高の實在と云ふ事に對し注意を起させる、さればオイケンは自分の講座を開いて居る學校の或る人々には甚く相反しても有機的教會の最高な地位を主張した。斯くて彼は基督教の體ならんことを要求し且つ神聖なる集合ならん事を要求したのであつた。そうして認識せんとする集合が討論會の水平に沈まなかつたならば、其はその指導者と同時に教師から確かな基礎的確信を要求するのである。とは云へ彼が現在の教會に對する評論は寛大な方の過ちでは無く寧ろ彼等が集合點、亦は精神生活の奉仕の如な一定不變の務として認められたからである。

終局の落着は歴史的宗教の不滅的要素に對する力強い證明に歸するので有る。何となればオイケンの基督教觀は一般普遍的な宗教で有るばかりでなく絶對的宗教の最も完全な合體であるから宗教の宗教である、之は吾々が精神的生活の實在に突入る完全した端始で有つて。亦之は「最始に最も明白な表意に對する精神の清くしい内容を持て來るのである。併し之は例も人間が神に對して不滅な指示に對する結鎖の如き觀念を持て居ても、超越した生活は總て徹々たる人間の生活を超越して居るのである。で開膽たる生活の問題は彼が中心の深い所に於て困難に會つた。之は罪惡から直ちに救ふばかりでなく自由を要求し自由を含む最も崇高な神、神性の徹底した人格を獨り保つた活力を收めた新世界の中に人々を變體させるからである。

で簡単に説くと之は生の新しい形を創造し人類に新しい力と新しい豪勇な氣を注ぎ精神に新しい運動を授け、最も憐なるもの或は單純なるものに一つの價値を與へたのである。故に時代の思想と正當な觀察とを以て衆と協和を計らう説得する基督教の因襲的獨斷な形を觀察すると、彼と基督教の神性と不滅な要素の中に於て深い何物かを測ることが出来る。此の自由主義に對して論難し是と同時に他よりも永く持久力を持つて居た事を悟ることが出来る、でなくとも時代の要求に依る適切な要求であつて、其の皮相的な愚鈍な無神經的な性質と戰端を開くのである。さればオイクエンが基督教の現在の形に對する評論は通じて、皮相的な且つ懶惰的な合理論と自然の信仰との趣味に沈で居ることが窺はれる。

後れたが、オイクエンの獨斷的否定の經驗は彼が最近の著書に依て論じやうさて吾人はオイクエンの著書「宗教の眞理」に意味深重な手落を警告して置く。されば吾々がかの書に崇拜、默想、精神の恍惚禮拜の哲學的見解に對して之をす探求めんとするのは無益である。なせかと云ふと、彼の著書を通じて彼に對する疑の上に密接せんとする斯くの如き精神的親密の周りに熟思を要す可き問題が横て居るからで、哲學的此の脱漏は、潜かに暗示を與へた如く、彼が生理學の特性的疑（全く獨乙に流行する生理學的實驗室の生理學に到着する）に依て理知主義から同量に分り易く引離して彼が卓越した活力的觀察に達着させんとしたからである。併し彼は此の作用と働との後ろでは之をば露骨に許さんとした此の作用と働との中には神と吾々との合體を表は

した個人的精神的經驗が有る——即ち精神の中心的態度は内部に精神其物を主とした神との一致で有つて、此の關係は作用を通じた人格の自己實在に於ける基礎的並に支配的要素で有る。併し此の手落に對する基礎的眞理とも云ふべき一つの疑は眞の哲學的特性の中に探求することが出来るが、それより寧ろ其の全宗教問題に對する進路に横たはつて居ると云つてもよい、こは活力的哲學にも拘はらず經驗的より寧ろ思辨的な疑惑を生ずるものとも云れる。(余は更に之を論せんが爲めオイケンの基督論に對して同一な非難を適用しやう)吾々は祈禱を強られた併し人民の宗教的生活に對する普遍的特性は最も甚く異つた理知上相反した自然から起つて來る自然の儘な且つ利那的の生活よりも少ないさうして確固不拔の精神は二心ある者と

か意志薄弱の人間には「見へない」と同じものから相傳へられて來た。して普遍的祈禱の本能は往時の迷信の遺物として全く缺點の多い上帝に對する自然的概念の如く放棄されんとするが此原因の多くは其祈禱に對して合力となる。

更に自己主義な迷信的祈禱者とか肉慾心の強い人とか罪惡の生活を送て居る人は危険とか災が來た時は「何處しても助かる事は出來ない、何となれば若し往時の迷信が斯んな時に復活させると云ふのが眞實で有つたならばかゝる機急な場合に自然の儘の精神は唯だ其惡をば爲すばかりだと云ふ。で皮相的な觀察者とか斯んな祈禱者は「臆病な精神だな、狂氣の様じゃないか、あれが毎日實際の「習慣」かしら」等と露骨に云ふだろう、で云ふ如うに誠の人ではあるまい、斯

な人の暗黒な廢蹟に歸した精神には不安と云ふ光が精神を縦横に閃いて居るからである。然し斯な人の精神には其が一番中心的なもの、誠なもの、自然に反しない意嚮だと影るからであるが——眞に自然的な意志とは精神は神に伴はれたもの、神に依て願の言葉は發せらるゝものと云ふことである。故に精神の力、精神の勇壯、其祈禱者の習慣で嘗ては破壊に依て取圍まれた、無能とか平凡とかの自然は一つの事實で是は生の哲學に依て最も嚴そかな熟考の中に導かれねばならぬ、して祈禱者の明かな徹底的な語は、ドクタア、エラノア、ハリス、ローランド氏が最も經驗的立脚地から便宜的に辨護して居る。吾人は澤山な祈禱者を必要とする、神も是を要求する、斯んな人は眞の力、有效の品性に依る顯著な人格で有るだらう。併し天賦の才

に對してまだ少ない。「私は人々を知つて居る」と彼女は言ふ、其人は是より他に特性的なのは無いので平凡な所から擧つた。彼等には才能有るものはなかつた彼等には明敏な者は無かつた彼等は心的の才能に對して注意しなかつたが其所には彼等から眞の力も乏いでた、之は幾多のより理知的な人物が明に缺乏して居た」と云ふ、斯な基督教徒の辨護者の言葉は宗教の門外者に對して反響した。然し祈禱に依て生活する人間が言つた事だから深い所は無い、之は其中心から離れて遠くへ徘徊つた様で腦裡に生活する神秘的な深遠な生活の確信から徘徊ひ祈禱の世界に這入んだが、併し吾々は此の實在の世界に入るのである、斯くの如きは吾々が宗教的自然の基礎的事實であつて此の宗教的自然は吾々が要求する哲學である。して祈禱者の満足な

理論は前に述べた。更に育索すれば吾々精神的生活の分析の外へ落すより全く上等だ、さてオイケンと彼が學校は其に對する側度外に出で、居る如く更に思辨的な教會の觀念は精神的臆病、老衰に對する追放を受けないに足る。してその裏には此祈禱は精神の最も英雄的行爲で有ると云ふ不滅の確信が横はつて居る、故に恰も言語態度觸覺とかの如うに其愛は愛其物で説明し且つ爲される非常な憂愁とか激した感情とか亦は其の流出する餘金の犠牲並びに務より更に困難道德的「行爲」で有る、して此所彼所に撰擇的精神の如うな斯んなものが有る、實在は行爲の生活と交際から離れ、に本當な名代の如く亦た利他主義の如く博愛主義の如く祈禱者とか沈思の生活を呼んだ、なせか云ふと之は彼等が「皆の爲に私は自づから神聖にします」と自稱

して居ることだからだと云つた。時に斯んな神命は唯だ病的に成つて危害を加へられ僧の道者の命の中に便宜的に化せられて仕舞つた。精神的活力と云ふ黙々とした通り合せの人此の精神的活力は總て人を通じての宗教的歴史が顯然とした表示を持って居る、そうして彼の精神的生活は完全した宗教哲學たらんが爲め他に依る高貴とか綿密な取扱の要求を無効にする。此の相一致精神の個別的直接の此の怠つた根底は其逢着するオイケンの基礎的觀察を想はしめ、そうして宗教は殆んどその一般的意識の中に於ける精神生活で以て同一とされる、何となればオイケンの宗教は個別的生活の個人的殘存者の如く思はれた神と遇着する爲めに個別的の覺醒の中で開いたので個々に生じて來る意識の絶對精神的生活と同一で有るとするのと同じ

だからである。然し實際、其一點は確實では無い、またオイケンは微々たる人間の其の範圍に屬した如うな個別的實在と個別的密接の福音の形は記さないだろう、で之が人格となる爲には後ちに個人的存在を遺して行かねばならぬ。オイケンの立場は現在の文士がした個人的言辭に依て補はれるだらう。故に大正一年七月二十一日のオーストラリヤ「基督教徒世界」の中に見たのを例としやう。

精神的生活に向ふ第一歩は個別的存在とか集團とかの生活より於り高い全體を包括する一般的生活の實在で有ると一般に言はれて居る。依て言葉を換へて言ふと、之は宇宙意識の黎明とでも言ふ可きである。併し是は精神的勝利とか内面的調和を確實ならしむるのではない、なせかと云ふと却て之は新らしい戦ひの要求に導くから

である。之は亦た積極的の主題、單に人間をば傍觀者の如く競技の賭物の如く遺すからで、然し此の疑問は彼の精神を壓し得るだらうか、また此は大全體をなすだらうか——其に對する此の流れの私は默從的に從屬しなければならぬだらうか——其物は私に就て疑ふだらうか、で一般的生活は其深い悲哀苦痛、罪惡に對する徹底的人間生活としての人間が此の一致とか「全體」を實現せんとする時ばかりに起つて來る、だから彼が其を経験せんとする時に當つて彼に「向」つて或物が働くばかりでなく「彼の内面」に働く如く有る。之は彼が矛盾とか戦の上から事件と事變とに更へられた又、必然から自由に更へられた、そうして宇宙の問題を自分の上に持て來て精神的現在に對する勇壯な

戦ひの中に結んだ、そうして大きな生命の務に分けやうと要求した、是で彼は精神的な人格となつて來たのである。

更に此の偉大な靈感的卷の中に異つた意義が含まれて居る、此の本は精神に疑惑の雲を遣して行つた。之は效驗ある力を持つて居る此の宗教は吾々に唯だ「舊」と云ふものに對する多少をなすばかりでない新世界を持つて來なければならぬ、其の舊に對する多少と云ふ之の新世界は決斷の要求、歸服、自由、協力の如き普及と浸入に依つて吾々に近寄つて來る。併し斯う云つてもオイケンはこの新世界の實在とか其引力に依つて吾々を服従させる、そうして其は正しく吾々の服従せんこと、彼をば撰ばんこと、是非せざらんことを強請した、吾々は其に對して自づから身を委ねながら低い經驗で以て争をさんと

する。さすれば吾は英雄的に突込まねばならぬ。吾々は信仰に對する意志を持つて居る。否、吾人は常に信仰に對して其意志を持つて居るか、若し持たなければ吾々は意志もなく直覺もなく唯だ最後に超越の世界に於て愛の世界に於て其信仰を技へるのみである、して發動的全智全能の神は其の最後の結果に對して考へだした辨論として罪の通られぬこととして人としての神として、十字架に獨斷者の死んだ償の死體としての神としてゝあつた。其は世界に依つて甚だしく矛盾させられたばかりか、眞の直覺は其を含み、その内容的復正に對して苦しんで探さんとした、さうして其は唯だ精神的千里眼の稀な尊い能率の中に認むることを得るのみで有つた。して確定した藝術と保持せられた精神的直覺は吾々が此の短かい生命に比すれば遙かに長

い、でなければ超越の世界は吾々で以て現示され、亦た吾々の中に現示されて居る感化、印象、要求、壓迫としてのみならず道德的權威、內的な客觀的として存在して居る。また吾々は之を探求するに、確定するに、打破るに、正當を以てし其が吾々生の哲學に講述せんとして居る事から眞の主觀論に對する吾々の經驗の中に遺した。

亦た此の權威は創造作用の中に其物自身で證明せなければならぬ。之は唯だ要求されるのでなく與へるのである、なせかと云ふと、こは吾々の歸服でなく自身の力に依て吾々を統治せんとする結果に基かねばならぬからで。之は自づから力の中で啓示しなければならぬ、其物自づから作用の中で擁護しなければならぬ、そうして吾々が進

歩觀に唯だ其れ自づから擴ぐるのではなく吾々直覺の冒險を正當とするのである。斯んな權威創造力は成立神學、又は福音信仰の確信で無限な人格の歴史に於ける高い道德行爲の中に於て吾々に有効に近づいて來るばかりである。併し吾人は是に對して翻つて見なければならぬ。オイケン（オイクン）の獨斷的基督教に對する態度は、吾人は今だ基督教たりやの中に暗指的、同感的文辭を認むることが出来る。此の本の中には基督教の客觀的意義の實際に顯然とした徹底的議論で以て筆を下して居る。そうして時代精神に於ける此要素は神と世界の基督教の觀察に反對し且つ衝突して居る、基督教に於ての此の要素は吾々の時代の重罪者に依て其の最後の拒絶をなさしむる。次の節は基礎の徹底した精神生活の實現に於ける宗教の基礎的官能を反覆しそうして

其は一般的から特性的宗教に進むのである。最後の構成的な節は彼が基督教の正義を論じたのであつて此の力は自づから新らしい形を示さんとした彼等は現在存在して居る如くに宗門の中に斯んな一つの改新てふ不可能性の結果で以てまた吾々時代に對する新基督教の必然に依て之を示さんとした。彼は意味深重に斯う言ふだろう「吾人の今日は未だ基督教徒で有るかどうか」とされば吾々の答は之に依てなすばかりでなく、否、之を爲さねばならぬ、されど若し其基督教が世界歴史的運動の流れの中に止つて居たならば、若しまた之が教會的透化の外に振出され、且つ於り擴い基礎の上に置かれるならば、吾人は獨り基督教徒のみで有る。されば此の中には現代の務と未來の希望とが横たはつて居る。

露骨に言ふと、オイケン是非獨斷的基督教に對して辨解を試みたのだ、なせかど云ふと、でなくとも通俗の唯理論の爲に摘出するのを最も必要としたからであつた故、彼に對して基督は唯だ理論とか教とかばかりで其人物を持って來なかつた。亦た宇宙觀ばかりでなく總て辨論に就ての氣分とか、移氣等の上に立つ事實の大實在を傳へて呉れたのである。基督教の不滅な本體の如き彼は其の新世界の中に移動させる精神的最上權の有力な確説、と其の消還的品性でふ總て人間生活の環繞を認めた。

また其の新世界の中に移動させる總て人間生活の精神的最上權の有力な確説と其の消還的品性といふ環繞を認める。故に基督教は消還の宗教で有つてその消還は印度宗教の理知的意識に於ける如くで

なく深遠な倫理的意識に於てある。其教理は理想の世界に對して人間の目を開かせない、そうして彼等、意識の錯覺に對しては完く彼等を育目にして仕舞ふ。併し不善との戦は彼等と呼び、そうして救の能働性の神は彼等の弱い體積とか戦ひから超越した世界の確固と云ふ所の善に嚮ふて彼等の行爲を導き彼等の意志を與へる。

其所にはオイクエンの基督教評價に於ける幾多の論點が有つて此の基督教は彼をば偉大な福音的教新で以て深い同感に導く。そうして彼の消却に於ける實際的感情的趣味は斯くの如き冠とも云ふ可きである、故に彼が近代思潮の特徴は是以外に意義を有する。不同一の媒介淺薄の欺いた樂觀主義は、時代と基督教との間の衝突の深さの淺い所とか端の純ふい所には求めなかつた。かくて彼は未來の基督

教を計畫しなかつたならば唯だ典型としての基督教でもない。でなかつたならば之に同感して大膽に時代の循法な要求に譲る可きである、斯んな基督教は時代の上に立つて、皮相的な微々たる無神經的な傾嚮に對して其の空虚な善を缺いた修養とか其の殘忍な愉快並びに安樂とか其の無法なそうして無情な文化に對して無慘にも戦端をば開くのである。何にしても吾人はオイクエンの宗教は宗教的平和主義で有ると云ふことを思ふだらう、亦た彼が調和を試みんとする所には一點の疑はしい點をも存しない、されば彼は宗教の教務者として忽ちにしてその教訓と靈感とを認め得るのである。オイクエンが人間としての基督に對する態度は深重にして且つ敬すべき價值を有して、彼が著書「人生の問題」——大思想家の人生觀——の中には全卷より更

に卓越して新生活の偉大な教導者としてまた創起者として敬す可き所が多い、故にそは彼が基督の繪草紙に於ける調和の如く、強弱に接する美は何處にも無い。——さればこの貢とも云ふ可き詩は是が中にて一層魅するが如きの調和力を以て哲學者と幾多の大思想家とを相接しめんとするのである。斯くて、稀に見る完全した人も宗教的天才も飾られた奮闘的精神とか慈愛深き言語で以て説き伏せられる。故に是をば唯だ空想的驚感の内容の空な情緒に求めんと欲し、又は無味乾燥な感覺の無感情的要求に求めんとするは空ではあるまいか、否、彼は是をば輕便な辭句を用ふる爲に「唯だ人間」として基督を觀るよりは寧ろ淨泉的人格として觀察した。されば之に依て吾人は彼の基督の光の中に力強い光を認むるばかりでなく、之に依りて吾人は

彼の基督に於ける吾々の光をば輝かさんとするのである。彼の耶蘇は基督教徒の模範的人物を造のみで彼が偉大なる事跡に對しては正當とはされない。故に近代の歴史的研究は斯くの如き平凡な唯だ一片の理を拒絶して以て再び確實な實在の承認を主張し、他の行に於ては彼は基督が占めた無雙の立脚地を説明して居る。依て是れは耶蘇が教徒の強く信仰した心情と耶蘇自身の意識の如くに觀られる。故に實際の意義の中にはオイケンの思想が基督を中心としてあることが認め得られる。

基督の肖像は現在の基督教の意識によるところとなつて來た。基督教は危険な實在に對するに確實なる守護の天使を以つて其を取圍んだ日々生活の人間に起る微々たる事件とか或は純い慣例に對して

又は常にそれ自身の生活の頑硬な且つ浅い所に對して、さては獨斷的唯理論に對して又は善行爲に於けるホリサン主義の深切に對して侵かした。此の力には其の歴史的進歩のあらゆる復雜な形から清い人間の單純に其をば召還し、先驅伴は之を門派とか黨中へ脅迫的に分散せしむる。斯かることは嘗て基督教内に於て基督に向つての背面運動を起した、そうして此の淨泉から直改新を起した。亦た、人生は其同化物に依て注意せられた小さな、短い成就の後に殘酷に破壊された地球の僻端で最も低い最も單純な行路を取て居る。然し此の精神力に通じて居る生活は其を充たして吾々人間の價值を根底より變化させる。オイクエンは今日迄で充分な幸福を持たらず如うに見へ而して不十分な總らゆるものを與ふる如くに見る。而して是

は彼の耶蘇をば總らゆる自然的修練に對する範圍に座らしめた。が、彼は價值無き唯だ喜悅に對して凡ての拋棄といふ汚辱を遺さしむるばかりか今日迄唯だ「世界」の範疇に對して解された如うな總らゆる人生を墮した。斯かる評價は吾々を捕えて去らせじと吾々が去るを拒んだ。吾人は總て宗門の獨斷と實施を棄てた後ち歸るす。故に斯くの如く此の生活は世界の永續的斷定の中に居るのである。獨斷的基督の現在の精神は最高な自己内應を無くしては受くる事は出来ない、してまた若し之をば吾々時代の主權者として命を下すとすれば基督教からして抹殺しなければなるまい、オイクエンは近代自由主義の態度を追ふて、福音の基督、寧ろ福音の後ろに潜む基督には反對で、彼の福音的教理の定義はオイクエンの著書「吾人は今だ基

督教徒たりや」の中に認むることが出来る。是は獨乙の正教派の情勢に啓示の青光を投じた如うであつて、再三再四彼が正教徒として受けた教理の叙述は驚きの如な或物で打破られど。若し斯な事が實際形ちの上に於て有たすれば斯の如き教理は獨乙に於ける敬神の精神を教へるのである。すると忽ちにして或る憐む可き聖像破壊黨員はより優れた原子にせんと其聖像をば破壊する。斯くて幾度か吾人は一般に神罰の緩和の如く定義した贖罪の教理を受けたのを認むるのである。故に再び述べやう神の本意な徹去は彼の神が血を見るまで慈愛の顔を見せる。斯の如く野蠻なことは幾多の理知的な小兒をして神は吾々に對して罪の深い基督の死てふ愛を向ける神の物語に逢着せしむるのである。

オイケンが降生を假定せし正教の教理に對する定義は絶智學者的概念と等しい無骨なのを啓示する——即ち是は取り代へられた純正哲學の混合、並びに眞に包意的有物論の愛らしからぬ形態で有る、其の基督に於ける二つの自然の教理が獨乙に於ては殆ど信用す可からざる程の最も未熟な且つ最も缺點ある形を教示して居る。そうして確言的懷疑で有る可き驚感を以て充さんとする此の本の中の直接的な反省の如き獨乙正教の全状態の懺悔は折々に保守的側から現はれる。例へば近頃發行された小冊子の「オイケンの基督教」と云ふのは獨乙の過正教派の論理者ドクトル、ルツドウイルヒ、フォン、ゲルテレの著作で、此の著書が正しく現代の讀者に對して出版されたることを知り得るのだらう。此の現代の讀者の十字架の上に於ける基督の崇

高な行爲に對する信念は世界觀に當抵分離することの出来ない程に關連して居る。此の世界觀は天使に對して、惡魔に對して且つ最高な魔王に對して完くの誤解とか錯雜する論理上の矛盾の上に進歩的教理の進化に於ける幾多の試に對して信仰を抱かしむるのである。

此の疑集した絶智學的典型は保守的指導者と機官による熱中のな評論の長い糸を以て先立たしめた。この一つは幾多苦痛した思想力を有する精神に嚮て「償還の語」を充した事を説明する。されば今後吾人はイサ、ツクワットが英國の少年に向つて「あなた方に喜びを生ませる善や恵に對して感謝をしなければ」と言つた事に對して辨解するだろう。先づ少なくともオイケンには彼自身がまだ少壯な時代の教訓を受けた正教の感化の下に働いて居る如うに見へる。故に降生の傳承的教理

を解釋した後ち、神性の英雄的廣用の逐回的意識に、亦た教化し得られぬ且つ如何とも仕難き思潮の表面に於て彼は此れ以外のあらゆる傳承的教義を固守せんとする——即ち傳承理であつてと云ふ三位一體説である、聖母マツヤの誕生、地獄に落つ、復活と昇天——而して殆ど憐むにたらぬ、また免かれぬ必然で以て此の中心獨斷以外に擧がつて來るのである。故にそれで以て此の密接する關接系統の一輪を徹去せんとするのは全體をば覆がへすので有つて。「茲には斯くの如き獨斷の進化の周圍に取圍いた恐ろしい論理が有る」之は中位に於て打破ることの出来なかつた其人は一つを望んで他を拒む事はしなかつた、と彼は説明した。此は絶智學者ドクター、ゲルトレルの惡魔の信仰と天罪の信仰との間の分離することのできない關聯の反響に

外ならぬ。「恐ろしい論理」と云ふ之に對するオイケンの引證が若し降生が古い信仰の純正哲學的な感覺に於て曉られたならば確かに之が現在に於て存在するのである。然し近代に成立された神學は其の位地から長き運動を持續し、斯くて其焦點は搖床或は十字架と云ふ道徳的奇蹟の如き降生を曉るのである。そうして斯くの如く論理化した宗教に對して聖母の降生は見當ちがいの生た救世主を信じて居る空な墓の如うである。斯く述べ來つた中で此の一つは其の最も解説した精通の意味を含で居るのではない。されば近代交感的論理はオイケンの非獨斷的基督教に對する要求を拒絶せんとすると共に即ち彼が最も明白に拒絶した無効力の結果に對する斯んな論理は寧ろ一つの疑惑を黜くるにちがいない。併し慥かに純正的假定に取圍まれ

た近代基督教の思想は斯かる獨斷の基督教を破り得ない連鎖とは見えない。

概活するとオイケンの基督の歴史に對する態度と經驗に對する態度は頑冥なものではない、されば彼は之をば特性的の眞道接で以て正直で此の本の中に表はして居るからである。さて是に依ると其の一人は直ちに眞の神となり且つ眞なる人間となる。然し彼の説明は科學的思想に對して矛盾するのみならず近代宗教的意識に對しても矛盾するのである。そうして彼が主張するところは斯の如き觀察の過失を除ては幻影說の中に葬むられて仕舞ふ。(勿論其は實際で、若し舊教理の自然が之をば意味したとすればオイケンが人間としての基督の他にない教理を知らんとするのは奇怪ではあるまいか)天罪絶

智學者意義で定約した所に彼の道德指命の強い倫理的確信の表現が窺はれるが併し之は頽廢した舞臺獨斷的表現を拒絶するのである。而して、和解者等を彼は寧ろ開連よりも分離するものゝ如に見なし、そうして神の和解者と想はれる、望みある崇拜に依て神に對する精神の崇拜に満ちた關係は傷けられるのである。斯の如き獨斷から彼は耶蘇の無比な生活と、彼が神の邦が身の近くに求められると云ふ疑がほしい教と神の子としての崇高な人格の即ち人間としての基督に轉じた。彼はその基督に對する歴史的評論は更に接した事の無い基督の對觀とする畫像を離れ得ないのを知つて居た。併し之は寧ろ使徒が言傳へ、弟子等の崇拜した唯だ信仰心の媒介に依て畫かれたのであることを認めて居た。茲に於てか潔白な人間の心髓は解か

れた、そうしてオイケンとはウインドランドに黨をなして居るが其所の人々は對觀的因襲の組織が無能の歴史的考究の意思を公にしたが此中に存在する勢力なる創造的生活の鼓動を知ることが出来なかつた。併し福音の背後に潜む人間の基督は中心を占め得るか且つ規範的位置は獨斷的神學に依つた基督に對して之を選定し得るか々疑問である、此に對するオイケンの答は明瞭に消極的であつて右の文中に見ることが出来る——其の位置規範的並びに獨斷的正派の規範的並びに規定的一点は神に對する關係の上に基礎を固め其神は基督の本質的神性から雙び無く發見された。故に此の假定の幾時代は其主に對して尊敬無制限に君主として軸領としての基督の人格を推した故に依て尊敬せねばならなかつた。然し人間の基督は獨斷から驚く可

き程の君主権が分離されるのを技へた。そうして其の偉大は仁愛の實在に對して制限を與つた、斯くして何うしても新らしい且つ神性な生活は之を吾々に傳へ且つ吾々の中になければならぬ實在の可能性と實在の量とを全體に傳へて呉れるのである。されば、吾人は此の物象の中に存する人間生活が規範的に且つ一般的に有力な形態を減じつゝあるのを認むるのである。併し唯だ無雙の人格のみは直接に之を類似せしむることは出来なかつた。斯の如く總てが最も崇高な人格と思はれ、基督の物象は神性の尊敬を以てせられ而して最も信仰の目的性として思はれるのも長くはあるまい、唯だ媒介の地位に立つて救を受けんとする總らゆる努力は、或は——か或は——だと云ふ無慈悲な右左する言語心に依て隔離されて仕舞ふのである。されば

神と人との間には吾々に對する實在の中間に介在する媒介物は無い何となれば吾人は昔の英雄に對する崇拜に沈まないからであつた。だから若し基督が神でなかつたならば、若し基督が三位一體の第二人物でなかつたならば、彼は人間じやないか、で相互の間の均しい如き人間で有るばかりでなく、普通の人間なのだ。吾人は是に依て指導の如く、英雄の如く且つは殉教者の如く敬せねばならぬ、だが併し吾人は直接に彼が中に吾々を曲げ入れ或は吾々自づから彼に基ずいてはいけない、是で吾人は無限に彼に對して従ふことは出来ない。されば吾人は次第に減じつゝある基督をば崇拜の中心とさせなければならぬ。依て吾々は此の觀察の出發點から以て人間實在の堪え難い定義をなすより外に無いのである。

斯んな幾多眞の實證の驚く可き程を公正なるものを以て飾られたから古い獨斷の立脚地と關係を斷ちて彼が自己の確信から畏縮して茲に新神學とか唯理論の全行爲に保護を乞ふようになつて來る。何となれば斯くの如く倫理的には虚弱なオイケンは鋼鐵の主調音で有るからであつて、オイケンの新基督教は中心的規範的君主の生活を有しないだらう、亦た斯んな援兵を加へて其の救済の結果を見て吾が生活に突入つた其有勢な且つ愛に充ちた全能の神として知られて居る神より以外に神性の救世主は無いだらう。其故に内面と創始的神性の立脚地から觀察した彼が哲學に於て意識した如うな精神生活より外には何物も存せないのである。されば斯んな基督教では基督は偉大な英雄的人格の中に於て最も優れた偉大な人格で有るに違ひない。

創造的個人性は是迄臆測した高い所の問題の如く擧つた、而して全統治作業に其の實在の充分な侵すことのできる激發的に正氣を與ふる精神に對して破竹の勢を養はしむる。故に現在の個人性は常に吾人に對して強大な刺戟と新生活の淨泉となつて來る。従てオイケンが世界歴史的運動を通じて普及させた此の新生活は吾々に向て來るのであつて、併し、其の運動の一點をば焦點とは定めなかつた。故に個人主義は其の精神的直接を得て茲に到着する、さりとて云へ、人物的媒介、否、現實的媒介物を経て來るのでない。斯く經來つた路を辿つて考へると、之を以て吾人はオイケンの歴史的基督教から甚く分離した高極の或る一點に到着したのだと云ふことが分る。され

ばオイクエンが稱ふ所の教會の組織と權威の如く認められる疑問が非常に興味あり且つ價值なるものとなつて來るしまた此中心發出に對する助力とも云ふ可きであらう、而して、基督教徒の倫理の効力の處置は茲に考ふ可き問題では無からう。

先づ第一にオイクエンの人間としての基督に對する進路は宗教的情緒に對する態度の如くに充分な經驗を経たものではない。されば精細に觀察して見れば茲に主觀となる可き進路に對するオイクエンの無經驗の徑路が有る、此二つは共に充分な正確を期する爲めの經驗的態度には相關聯して最も必要である。即ちそれは一つを歴史的評論としてであつて、他をば新理想主義の研究としての新道德實在と新宗教的意識の實在である、是は普通一般に履み來つた如く其の唯だ

冷淡に研究した真理の法廷に對するが如く從屬でなかつた。してまた、この神學は其の新らしい保護を放棄せんとする其の宗教的直覺の占解に對する從屬でもなかつたのである。

されど之は其の濃厚な人間の形の基督に向つて現代的宗教の意識の歡迎を迫る、かくして新理想主義は其の「全體」が歴史的基督ではない組織の中に入る事のみを許す。さて吾々は其教徒の上に起した印象の正象を取らねばならぬ。この印象は消還の經驗と何等異なる所もない。今茲に私をして言はしむればオイクエンの智識は獨斷的定式の後ろに潜んで居るのであつて、茲に歴史的基督教が有る、此の中には嘗て本の中に表はれた一流の精神生活の流が有る、是をば吾々は今日これをば一致の中に存在するものと感じ得る。然し其は全

然特種的な充分で有つて又、疑問は總て基督教徒の時代に於ける精神の深遠な生活と不思議な生活を送つて居た斯んな被選者では無い。そうして神と共に彼等の精神といふ冷たい花園を逍遙した、或る時は今日の精神生活の趣味の中に排斥する眞の獨斷から營養物を誘ひ、或時は輕視とか或は彼を排斥すると云ふものを誘ふて逍遙した。是は寧ろ消還の古い經驗であつて、是に對して低い基督教徒の精神は迷ふ基督教に於ての唯だ一つのもので有る。して幾多趣味有り且つ粗い方言葉と瞬間的な方言の精神の中に一般的言語が一つ有る。是はポーロの正當と主張する教義や、ソツチエルスの後ちの經驗とジョン、ウエスウエイレクとか、セラアマツチャの背後に有る説法とか講釋である。正耶蘇は基督で有つて吾人は彼と共に働く。

今一つ立派な認識が有る、是は多くの苦心した巧みな結果であつて之が結果はガリ、アン、イエスに依て製造された印象に對して當然責を負はざる基督教の使徒的概念を證明せざることを公にした。併し寧ろ之は現存して居る基督論とか或は救世主の教義に對して其人の確言は忽ち壞された、そうして人としての基督にも同様で有つた。併し唯だ必要だと思ふのは近頃最も是を悲しんだ、ドクドル、ウエルデポーロに關しての信念であつて、ポーロが彼の弟子ジュウイシウとベレニスナツクを先に廻して傳道師の基督を十字架の刑に處せしめたと云ふ斯の如く光輝有る試みを吾々に與へた。——即ち基督はユダヤ人とかギリシヤの無智な奴共に取つては邪魔物で有つたに違ひない。されば現存して居る救世主の教理の感化に對して多くは認

めだが少數の意志は末端に思辨的救世主、基督自づからを生活せしむることは出来なかつたと云ふ確信を以て例も反對せんとするのである。故に總て斯な一致したもので異つた思想の要素は中心を取圍いて唯だ賢い彼はしない驚感の力に依て説明するばかりである。そうして吾人が既に摘出した如くに此の心目を惹かれた事は唯だの印象では無くて、即ち是は私を愛して呉れた、私に彼自づからを與へた救世主の經驗の中に現はれた。何と云ふ微々たる印象で有るか、併し光輝は勝利の得た救世主の如き十字架に磔けられた主が傳道せんとする最初の懺悔者を含んで居る、或はポーロの心は此の認識の中に力強く響ひたものを含んで居るのだらうか。彼が創造者或は世界の精神に依て全體を感化されたやうに確言したのであらうか、

吾人は意志の自由に依て人間の基督を精査し試験しなければならぬ。併し何にしても吾々が其の因襲的な形態の或る所を評價もしなければなるまい。其は全く之に含まれて居る單純な風潮を公表しなかつたからである。

誰でもポーロの使徒書を消還の教理の實在を念頭に置かず正直に讀んだらう、如何にしても其の缺陷と短命論は新らしい印象でまた古は思辨の巧みな聯關が有つて彼が精神の生命經驗と熱情的歴史の表示が遺されて居る。併して此の教義の裏面に潜んだ消還の經驗は時代を通じて暴風雨に搖られた幾多の精神に對して語つて居る。そうして其の獨斷的地位が黙々として變化しない事を潜々と語つて居る。されば一時此時代はポーロの精神で基督の教理を捨てる如う